
少年のファンタジー

魔王(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年のファンタジー

【Nコード】

N7665S

【作者名】

魔王（仮）

【あらすじ】

少年 翡翠は下校途中に突然異世界に召喚され、剣と魔法のファンタジーな国に落ちてしまった！

翡翠は無事に帰って来ることができるのか？

まあ多分無理だろうが。

初投稿です。初めてまともに書く小説なので相当読みにくいと思いますが頑張って書いていきます！応援よろしくです！

とある少年のプロローグ

ああ

暗い

怖い

誰か 助けて

俺は僕は私は

誰

だれ

ダレ？

僕は何？

ナンデ生きテイルノ？

ダレかオシエテよ。

+++++

おはよう、こんにちは、そしてこんばんは。

俺は翡翠、霧神 翡翠 っていうんだ。覚えておいて欲しい

「おーい、翡翠お前何やってんだよ、お前今日俺とカラオケ行くっ
つったろ？さあさ行こうぜ！」

んでこの男が……………面倒だから生徒Aという所にしておこう。

「てめえ、今失礼な事考えなかつたか？」

す、鋭い！

「は？なに言ってるの？誰がお前みたいな生徒Aの事考えたと？」

「いやいやおかしいだろ！生徒Aってなんだよ！俺はエキストラか
なんかなのか！？お前十分に人のこと馬鹿にしてんだろ！？」

「はッ？笑止！俺は生徒Aを馬鹿にしてるんじゃない……………イジって
いるんだ」

「変わんねえよオイ！？なんも変わってねえよ！？馬鹿にするのと
イジるってどこかわかってんだよ！？」

「……………面倒くせえなあ」

「ほら言ったあ！俺とことん馬鹿にされてるうう！！！」

なんだかんだで異世界入り（前書き）

相も代わらずグダグダです。
ではお楽しみあれ。

なんだかんだで異世界入り

見渡す限りのただっ広い平原、平原、平原。

右には平原。

左にも平原。

前も後ろも平原。

上には青空、雲一つない憎たらしいほど晴れ渡った青空。

え？ここどこ？

「え？どうなってるの？」

よし現状確認だ。

俺、霧神翡翠。

15歳。

中学生。

血液型はA型。

身長は176センチ。

体重は63キロ。

コーヒー牛乳とプリンが大好物。

母さんと父さんと妹の四人家族。

今朝は8時に起きて、鮭茶漬を食べた。

確か下校途中、俺の足元に黒いのが……、黒いの？

「隊長！目標が動き始めました！なにか獲物を追っているようです！」

「そうか。では全隊員！追跡を開始する！」

「ハッ！」

彼等は騎士団。

この国の守護を仕事とし、国民を脅かす存在を排除するのも仕事の
一環である。

「隊長！目標、ボルバックベアを発見しました！」

「わかった！目標について詳しく説明しろ！」

「はい！……えっと奴がさっき追っていた獲物についてですが、奴
は人間を追っていたようです」

「はっ？」

「いや、ですから人間を。」

その時！

熊の化け物を一つの閃光が貫いた！

+++++

「はあっはあっ、っく、もう、限、界、だって…。」

追いかけてっこすること2時間。え、2時間！？俺そんな走ったの？俺体力凄くね？

「つつか、こんな事やっている場合じゃ。」

そう、まだ野生的プー〇んは追って来ているのだ。

どうする俺、このまま逃げ切るか？いや無理だ。流石に体力がヤバい。ん……？待てよ、ここがもし異世界だったとして、俺がここに喚ばれたとしたらなんらかの能力があってもおかしくはないんじゃないか？いや……でも……いや、やってみよう。ここで追いつかれて死ぬよりマシだ。

「…ふう。よし来いや化け物、消してやんよ。」

「グルアアアアアアアア！」

…はつきり言っつてめっちゃ怖い。ただどこかで死ぬほうがもっと怖い！俺はこの化け物を殺して、生き残る！

そして俺はとつさに頭の中に浮かんだ言葉を叫んでいた。

「貫けえ！雷宿りし迅雷の槍！ヴォルテックスピアー！」

次の瞬間。俺の背後から飛んでいった稲妻の槍が化け物を貫いた。

「えっ？」

そして化け物は一瞬で焼けて炭と化した。悲鳴を上げることなく、文字通りの炭に。

いや、それよりも俺は頭に浮かんだ言葉と、それを唱えたら発動したモノについて驚いていた。

俺が唱えた？今のを？今のはなんだ？F○やD○クエやテイ○ズみたいな魔術か？つうか俺が使ったのか？

そんな驚きを隠せないまま。

「動くな！今、貴様が何をしたのかはわかっている！さあ速やかに投降しろ！」

俺は捕まった。

なんだかんだで異世界入り（後書き）

感想よろしくです。

隊長さんの魔術教室（前書き）

極めてアバウトに書きました。誤字、脱字などがありましたらご報告をお願いします。

隊長さんの魔術教室

「……………。そうなのか、嫌なことを聞いてすまない、ヒスイ君。」

「いや、別にいいんですよ。俺も自分の名前しか覚えていないし、この世界のことを知るきっかけが出来たんで。」

どうしてこうなったか……………聞きたい？

その後、俺は隊長　ルシファランというらしい　に自分は別に害をなすつもりは無いことと、自分が記憶喪失であるということの説明した。

だって記憶喪失のほうがこの世界について聞き出しやすいからね！
まあ説明は割愛させて頂く。

要約すると

この世界は3つの大陸と小さな島が幾つかある。
大陸の配置は、

○

○ ○

という形で、左下の大陸が人間が多く住む《勇者王の大陸》通称、『セルランド』という。

右下の大陸が魔族　代表的なのは、エルフ、オーガ、ゴブリン、
等である　が共存する《魔大陸》通称『デモンズシャウト』。

中央の大陸が龍族やドラゴン系に属する魔物が共存している《龍の大陸》通称『ドラゴニクス』というらしい。

この大陸の中で『セルランド』と『デモンズシャウト』が約一万年前の大戦争。《混沌と殺戮と破壊》 ジ・エンド を最後に停戦が続いているそうだ。

そして俺がいる所が『ドラゴニクス』の北西に位置する平原らしい。

次に魔術についてだ。

やはりこの世界には魔術がある。

魔術には「攻撃」「回復」「増強」「補助」の4つの目的と、「炎」「水」「風」「土」「雷」の基本属性、さらに「光」「闇」「無」の上級属性がある。また、基本属性の5つは、組み合わせにより、新たな属性にもなることがある。

例えば「炎＋風」で「爆」。「水＋土」で「氷」。といった具合だ。そして、いざ唱えよう。となった時に必要なのが「詠唱」という作業だ。

この「詠唱」は別にしなくてもいいらしいが、するとしないなどでは決定的な差が3つある。

一つは発動に必要な魔力の量。これは、もちろん「詠唱」を行った場合のほうが消費が少なく、しなかつたら消費量が3倍以上に膨れ上がるという。

一つは発動するかどうか。

そもそも魔術とは、己の頭の中で、発動したい魔術の具体的なイメージを作らなければならない。そのイメージが、「詠唱」しなかつた場合、より精密になり、なおかつそれを早く実行しなければならぬ。そのため、イメージを作るのに失敗したら魔術そのものが発

動しない恐れがある。

一つは単純な威力。これが「詠唱」有り無しとの決定的な違いであり、弱点である。「詠唱」が無かったら、魔術の威力が通常の10〜20%までに激減するからだ。

ただこれだけ聞くとデメリットが多過ぎるがそれだけのメリットもあるといえはある。

一つに《無詠唱》というだけあって一瞬で魔術が発動できる。

一つに発動時の隙が極めて少ない。などがメリットになる。

だがそれでも大抵の魔術師は《詠唱》を行って魔術を使うそうだ。

+++++

「ありがとうございます、ルシファランさん。おかげで大体は予測がつかしました。」

「いやいや、別に礼など要らないよ。目の前に困っている人がいたら助けないと気が済まない性分だね、まあ場合にもよるがな。」

やばい、ルシファランさんめっちゃ優しい。

今更罪悪感湧いてきたよ俺。

「そうだ、ここから西の方向に少し進むと街がある。今から言っても夕暮れには着くだろうからもう向かうといい。ああそれから、これは魔物を討伐してくれたお礼だ。」

そう言っつてルシファランさんからエメラルドの色をしたペンダント

をもらった。

「そのペンダントには治癒の力があってね、少し深めの切り傷程度なら、魔力を込めるだけで回復できるんだ。まだ何も思い出せていないだろうからそれを存分に活用してくれ。じゃあなヒスイ君。」

そう言っつてルシファランさんは隊員達を引き連れて南に向かって歩いて行つた。

やべえよ、めっちゃルシファランさん優しいじゃん。普通会つたばつかの奴にここまでするか？すげえなあルシファランさん。めっちゃカッコイイじゃん。

「んじゃ、俺もそろそろ街とやらに向かいますか」

そうして俺は西に向かって歩き始めた。

隊長さんの魔術教室（後書き）

感想よろしくです。

ギルドに行くゾー！（前書き）

これからは一日一話を目標に更新していきたいと思えます。

ギルドに行こう！

やあやあこんにちは。
毎度おなじみ翡翠だぜ！

今俺は、ルシファランさんに教えもらった街に向かっている。
まあ本気で走ったら多分10分程度で着けるんだろうが、ここで使わなくても別にいいじゃん。いや、ただ面倒臭いだけなんだけどね？

あ！そういえば今から行く街の説明がまだだったな。

その街は『城塞都市マルシクス』といって、なんか、見た目がものすごいゴツいらしい。ただ、その分魔物や盗賊などの被害は両手で数えられる程度の被害とのこと。でも《城塞都市》と呼ばれる街に乗り込める魔物自体がそれなりに強い個体が多いから、被害もそれなりに大きいそう。………まあ安全な街なので商人の行き来が盛んで、街は賑わっているそう。

+++++

そんなこんなで街到着。

「おお〜」

本当にすごい賑わってる。すげえなあ〜、こんなに賑わってる所に来るのって久々だなあ。

「そういえば俺って、武器らしい武器持ってねえな」

そうなんだよ俺まだ武器持ってねえんだよ。あ、でも俺ってどんな武器が使い安いのかなあ？

「行つて見てから考えるか。金もないし」

こんなに賑わつてるんなら武器屋の一つや二つ、普通にあるだろ。そう思つて歩いていたら、目の前にめっちゃでかい建物が！

「ん？なんだこり」

なんてベタなせりふを吐いて建物に入ると、中には広いホールと紙が幾つか貼つてあるボードが6こ。広いホールにはテーブルが何個もおいてあつて、奥には受付がある。

そんなとき俺には、

「ようこそ！王都直轄ギルドマルシクス支部へ！」

という威勢のいい呼び込みが聞こえた。

え？ギルド？ギルドってあの？モンオンに出てるやつ？つうか俺、モ○ハンやったこと無いからよくわからんのだが。誰か！俺に説明を！

「……………あの、初めての方ですよね？そうでしたらあちらのカウンターにてこのギルドの登録ができますよ？」

本当に説明が入った。まあいっか、多分金も稼げるだろうし。

「あつ、はい。わかりました」

とだけ返して受付に向かった。来た時よりも楽しげなのは気のせいだ。誰がなんと言おうと気のせいだ。

+++++

「初めての方ですね？では登録します。まずはこの紙に必要な事項を書いて下さい。」

おお、めっちゃ綺麗な人。っていう言葉を飲み込んで。

「わかりました。」

とだけ言って、渡された紙に……。この世界の字ってどう書くの？……うん、日本語で書こう。真面目に伝えたらわかってくれるよね？うん大丈夫。よし書こう。
まあ日本語で全部書いて渡したら、

「はい、キリカミ・ヒスイ様ですね？ヒスイ様はこれよりギルドの一員となります。まず最初にギルドの説明を……」

あれ？普通に通じた。よし。要約しよう！

まず、ギルドっていうのは、依頼人がギルドに依頼をして、その依頼をギルドの一員、傭兵が受ける。そして依頼が完遂したらその証拠をギルドに見せる、そうしてやっと傭兵に報酬が支払われる。ってサイクルの施設。

んで、傭兵には下から、

E
D
C
B
A
S

の順にランクが定められている。このランクは依頼を完遂するたびに少しずつ上げていくことができる。もちろん、上のランクほど強い傭兵がいるし、ランクが低いほど傭兵も弱い傭兵ばかりとなる。

同じく依頼にも同様のランクがあり、傭兵は自分のランクの一つ上のランクの依頼までしか受けることができない。

などがギルドの大まかな説明だ。

「それではヒスイ様、ヒスイ様はランクEからのスタートとなります。これからの精進を期待しています。」

そうして俺は傭兵になりました。

あっ、そうだ早速依頼受けてみつか！

それで俺はボードに張り付けてある依頼用紙を見てみた。

「依頼内容 ウルフの群れの殲滅。

依頼概要 俺の家の後ろの山に少し前からウルフが群れをつくりやがった。まあ俺の持つてるロケランを使えば楽勝なんだが、流石にウルフ程度に使うのはちいと気が引けるんでな、そこであんたらに一つ仕事を頼みてえ。大丈夫だ、報酬ははずむ。

報酬 銅貨50枚

依頼ランク E」

……………何かがおかしい……………え？ロケラン？めっちゃ現代的じゃん。別に依頼しなくていいじゃん、ロケラン使えば楽勝なんですよ？気が引けるって？んなもんするかああああ！！！！

よし次。

「依頼内容　　薬草の伐採

依頼概要　　フッフ、後はこれさえあれば！私はこの世界の神になる！！さあ愚かな傭兵共よ！私の手足となって働きなさい！

報酬　　銅貨10枚

依頼ランク　　E」

いやいやいやいや！なんかおかしいって！なんだこの依頼人！絶対なんか危ないこと考えてるって！つうか自分で神言っちゃったよ！
？この人危ないって！

ふう……。

よし次。

「依頼内容　　アイツの討ばて」

はいはいダメダメ！

アイツって人じゃねえか！ダメだよ人殺させちゃ！！つうかこんな依頼いいのかよ受けて！ギルド側もなんでさも当たり前のようにこんな依頼貼ってんだよ！！？

はあはあはあ……。

よし、次で最後にしよう。

「依頼内容　　ファンゲウルフの討伐

依頼概要　　家の裏の畑をこいつが毎日荒らしに来るんだ。もうどうにかしてくれ！

報酬　　銀貨5枚

依頼ランク　　D」

うっ……。これでいつか！

よしこれが俺の初仕事だ！！

ギルドに行こう！（後書き）

今日、部活中にあったこと。

私「えつとさあ、この会話さ、俺の投稿してる小説のあとがきに使ってもいい？」

友人「ん〜、別にいいんじゃない？つうか俺にもなんか考えさして！……どうせお前の乏しい語彙じゃ面白くなさそうだから」

私「えつ！？酷くねえお前！俺ってガラスのハートなんだよ！？すぐに割れちゃうよ！？」

友人「はっ？ガラスじゃなくてプラスチックだろ？ほら、丈夫だけど傷つきやすいし、お前にぴったりじゃん」

私「お前は……」

以上あとがきでした。

感想よろしくです。

さあさあ来ました初仕事！（前書き）

うつ…24時までには更新できなかった……。

さあさあ来ました初仕事！

さあ初仕事だ！

つて意気込んで依頼人の家にきたよ！

「ああ！傭兵の方ですね！あなたが頼りなんです！あの魔物のせい
でうちの畑がめっちゃめっちゃにされたんです！傭兵さんどうか助けて
下さい！」

「はい、わかりました。それで畑はどこですか？」

柄にもなく敬語を使う俺。

「はい、こちらです」

+++++

よし、少しオブラートに包んで表現しよう。

大 惨 事！！

いやいや、やべえってコレ。ただ単に荒らされてるじゃすまねえつ
て！なんで畑のあちらこちらにでけえ穴が空いてんのよ！普通畑に
穴が空くか！？

「それでは傭兵さん、奴らは夕方にやって来ます。御武運を！」

いやいや、そんなキラキラした目で見られても……。つて奴ら！？
今奴らつて言った！？魔物って一匹だけじゃないの！？たしか依頼
書には「殲滅」じゃなくて「討伐」って書いてたよ！？普通2体以

上に「討伐」って使わないよね？「殲滅」だよな普通は！？つうか奴らって少なくとも3匹位はいる雰囲気だよ！？俺初仕事で死んじやったらやだよ！？

はあはあはあ……………。

でも……………やんないと終わんないしなあ……………やっちゃうか…こないだのやつ使って……………。

キキキキ

夕方。

そして、俺の目の前には案の定5匹（ワオ！2匹も多いネ！）のフアングウルフが……………ちなみにギルドにあった魔物図鑑でフアングウルフの姿形、討伐鑑定部位、行動パターン、などは記憶ずみだ！大丈夫、その辺に抜かりはない！何てったって初仕事だもん。

あと、ここに来るまでに結構いろんな魔術使えるようになったよ！この小説の得意技、「割愛」を用いてな！

「んまあ、ちゃっっちゃと殺っやいますか！《轟け雷！彼の者に裁きを下せ！》ライトニング・ジャツジ！」

刹那、一筋の雷光。もとい閃光が1匹のフアングウルフを炭にした。

「ガールル！グルアアア！！」

それに激昂した4匹が俺に飛び掛かってきたが、

「《風よ、我に宿りて力と為せ！》ウィンドウェア！」

瞬間、魔術を唱え、効果により身軽になった俺は跳躍、そしてそのまま、

「喰らえ！風刹拳！」

前の世界で、じゅちゃんから教えてもらった技を放った。

風刹拳は、相手の上空から脳天に、全体重をのせたストレートを放つ技で、並の人間はこの技で息絶える。そんな物騒な技を俺やじいちゃんが覚えているのは、万が一に備えてのことだ。さらに今放った風刹拳は、魔術による身体強化も相まって、相当な威力となったらしい。

そんな技を見事に喰らったファンゲウルフBは頭から血を噴き出して、そのまま息絶えた。

これで2匹。

着地した瞬間、ファンゲウルフ3匹の攻撃を喰らってしまったが、さほど致命的でもない。あれ？俺、結構強くな？じいちゃんに鍛えられてたからかな？まあいつか、そのおかげで助かった。

「よし、これで終わらす！《聖なる意思よ、我に仇なす敵を討て！》ダイバインセイバー！」

刹那、轟音とともに、畑の向かいの森林が更地と化した。

「おおお〜！！使えたあ！ダイバインセイバー使えちゃったよ！やべえ、めっちゃ嬉しいい〜！！」

まあ、色々あったけどこれで初仕事、終わったあ！

+++++

「はい、確かにフアングウルフの牙です。ではこれで依頼の完遂となります。これは報酬の銀貨5枚です。お疲れ様でした！」

ふいふ、なんか久々に体動かしたかなあ。あ！前に野生的プー〇んに追い掛けられたとき散々走ったか。まあいいや！細かいことは。

あ！そういや「銅貨」「銀貨」「金貨」と「青銅貨」「白金貨」の説明がまだだったな。

日本円に換算すると

青銅貨 = 1円

銅貨 = 100円

銀貨 = 1000円

金貨 = 10000円

白金貨 = 100000円

というような感じ。

ちなみにこの世界の平均月収は銀貨5枚と銅貨8枚の5800円で、よっぽどのが無い限り、これで一月は暮らせる。あと、白金貨は価値が高すぎて、国同士の、金の流通に使われるのがほとんどを占めている。

以上！

さあさあ来ました初仕事！（後書き）

感想よろしくです。

え？こんな所に？（前書き）

さあさあ行きますよ〜！

お楽しみ下さい！

え？こんな所に？

俺は今、色々な商店が軒を連ねている大通りを歩いている。

理由は……まあ、武具探しなんだけど。

まあこのチート能力使えば武具なんて必要無いかもしらないけど、まだ完璧に使いこなせる訳じゃないし、何よりドラ○エでいう「布の服」でギルドを出入りするとさ……他の傭兵さんの視線がさ……痛いんだよ……。

そんな訳で武具屋を探しているんだけど……。

何故か全然見当たらないんだよね。

なんで？もしかしてこの街には武具なんて必要ないのかな？そういえばここ城塞都市だもんね。

「はあ……。まだ当分は素手に布の服か………」

と、そこで！

「その兄ちゃん！うちの武具はいらんかね？」

「います！！！」

念願の武具屋に出会えました。

+++++

「ほえ、色んなのがあるんだねえ」

本当に色んな武具がある。

大剣、双剣、片手剣、レイピア、槍、鎌、斧、ハンマー、杖、メイ
ス……………etc

「んん〜……………。やっぱり刀はねえかあ〜」

そう、日本を象徴する（俺の考えだが。）刀が無いんだよ、刀。

じいちゃんから刀の稽古も受けてたからなかなか使えたんだけど…
……………。諦めっか…。

「んん？兄ちゃん、カタナってのが欲しいのか？確か……………えつと…
…そうだ！だいたい20年前位に同じこと言ってた奴がいたんだよ」
ん？刀を知っている奴？

「そのこと、もう少し聞かせて貰っていいかい？」

「ああ、それでそいつにカタナは無いと言ったら、ならこれと同じ
物を作ってくれて言われたんだ。そんな時に渡されたやつがカタナ
っていうやつなら今から作れるぜ？」

「マジですか！？ならお願いします！」

驚いた。時代は違うとはいえ、同じ日本人がこの世界に来ていたなん
て……………。

まあその人のおかげで刀を手に入れることができるから、助かった。

「おう！わかった。なら今から作り始めっから明日の朝に取りに来てくれ！ああ、代金はいらねえぞ？あん時も初めて見た武器だったから、あんま良い出来じゃあ無かったんでね。まあ今回はうまくいかもしれんが、それで勘弁してくれんなら代金はいらねえぞ？」

「本当ですか！？じゃあどんな出来でもいいんでそれをお願いします！」

まさか、刀が無料で手に入るとは思ってなかった。嬉しい誤算だ！

「おう！んじゃまた明日来てくれよ！」

+++++

あの後考えたんだが。

やっぱ今ところは刀だけで旅を続けることにした。

防具買っちゃったら食料買えなくて餓死…なんてことも……………。

そんな訳で防具はまた今度にした。

本当は刀に西洋の鎧は似合わないと思ったからだけだな。

そんで今はギルドの中にいる。

今は少しでも金が欲しいからな。だけどギルドの中がちよっとアレな雰囲気なんだよね……………。

何だろう、俺、この世界に来てからこんな目にしかあってないかもしれない……………。

違うよね！？気のせいだよね！？

こんな時はさっさと退散するに限る。よし、さっさと依頼決めよ。

「依頼内容 フレイムバットの殲滅

依頼概要 近くの森にこいつらが大量繁殖しちまったらしい。このままじゃ犠牲者が出るのも時間の問題だ。大至急、殲滅して欲しい。

報酬 銀貨10枚

依頼ランク D

よし、これにしよう。

そう思っただけで依頼書を取ろうとしたら、

「無理無理！お前みたいなガキにそんな依頼こなせる訳ないだろう？さっさと帰んな！ここはガキの遊び場じゃねえんだよ！」

そう言われて、依頼書をひったくられた。

かっちーん。

「へえ、そうなんです。世の中には自分と相手の力の差すらわからない軟弱者もいるんですね。」

ちよつと怒った。

「なんだとこのガキ！てめえ誰に向かって口聞いてんだコラ！俺様はランクBの上位傭兵だぞ！てめえとは格が違うんだよ！」

「ほう、じゃあ上位傭兵は自分より下のランクの傭兵を見下している無力なバカもいるんですね。全く、どの世界にもそういう人種はいるもんです。ホント、バカみたいですね。見下すくらいなら少

しでも依頼をこなしてランクを一つでも上げたらどうですか？まあ大方、全然ランクが上がらないからイラついて八つ当たりしてるだけだと思いますが、本当、無力ですね。あなたみたいなプライドの塊は」

おつと本音のオンパレードになってしまった。
まあいつか、別に本当のことだし。

「てめえ!!!」

そんな事を言われてランクBの上位傭兵さんはトサカにきたよう
で腰の剣に手をかけた。

「おつと、ギルド内で剣を抜く非常識極まりないバカな傭兵なんて
まさかいるわけ無いよなあ」

しかし、その剣は抜かれる事は無かった。
以外なる乱入者によって。

「えっ？何で生徒Aがここに!？」

え？こんな所に？（後書き）

なんか無理矢理繋げた感じが……。

感想よろしくです。

新たな仲間……誰だかわかるよね？（前書き）

お楽しみあれ。

新たな仲間……誰だかわかるよね？

「ふうん。やっぱり此処にいたか、翡翠」

「え？何で生徒Aが……？」

「つてお前！まだ俺のこと生徒Aって言つのか！？」

「じゃあ、女なのに男言葉で喋る変な女の人」

「……お前さ、まさか俺の名前忘れて無いよね？」

「そんなはずないだろう。お前の名前は 生徒 A だ！」

「いやいや！全然違うかね！？つかなんで俺達こんなコントしてるの！？」

「冗談だって、久しぶりだな、碧。」

「ホント、すごい久々だなあ」

そう。この生徒Aは本名、白星 碧（みどり）という、女の子なのである！男言葉だけだね。

ちなみに俺の幼馴染みでもある。

「ああ！？なんだてめえはあ！！！」

あ、そうだった。なんかやってたんだっけ？

「いや。もうあんたに用は無い。失せる」

おーっと、碧くん。そんな火に油を注ぐようなこと言っちゃあ。

「なんだと!？」

ほら、言わんこっちゃ無い。

そして、ランクBの傭兵さんはキレてしまったようで剣を抜いて碧に切り掛かった!

が、その刃は碧に触れる事は無かった。俺がその剣を折ったからだ。

「おうおう傭兵さんよ、お前は何の抵抗もしない女に対して切り掛かんのか?」

「へっ?」

剣が折られてアホ面になる傭兵さん。

「っ! 覚えてるよ!！」

おーっと、メジャーな捨て台詞をありがとう。

「お前………………。守ってくれたの?」

っ!?! ところで上目遣い!?!

「い、いや、そうじゃなくて。ただ単に、親友に傷つけられたくな

「かつただけ」

「ふ〜ん……。まあありがとな！」

そう言っただけ抱き着いてくる碧。

「おい！ちよつと！抱き着くなつて！」

「なんだよ。別にいいじゃんか、嬉しくないのか？翡翠」

嬉しいです！すつごく！

なぜなら碧は俺の初恋の人でもあるから。

「い〜から！離れろつて！」

「や〜だ！」

なかなか離れない碧。

「なんか買つてやつから」

餌付け作戦。

「いいよ」

即答する碧。

はあ、やつと降りた。

……ちよつと残念。

「よし。なんだかんだで脱線しまくつたが、碧。なんでお前がここ

にいる?」

一番知りたかったこと。

「えっと、それは。俺もこの世界に『落ちた』からだ」

俺と同じだ。

「そっか。んじゃ、一緒に来るか?」

「もちろん!」

そしてまた俺達は、一緒に行くことにした。

+++++

「そんでお前はギルドに登録してんの?」

「ああ。俺はEランクだ」

「えっ?俺より高いの?」

以外だ。碧が……………。俺より…………。

「えっ?俺より低いの?」

腹立つな、コイツ。

まあ、手は出さないけど。

だって初恋の人だもん。

…………。まだ告白してないけどね?

「んじゃあまずは仕事を終わらしますか！」

「そうだな！」

そう、現在俺達は、さっきの依頼。フレイムバットの殲滅をしているのだ。

しかし、大繁殖のせいだ。数が尋常じゃない。

倒しても、次から次へと飛んでくる。

「くそっ！ラチがあかねえ！碧！少し時間をくれ！」

魔術で決める。

「応！わかった！」

言って、フレイムバットを引き付ける碧。

「よし……。離れる！碧！《風よ、集い、暴風となりて、彼の者たちを切り刻め！》スラストサイクロン！」

集まった風が嵐を巻き起こし、フレイムバットを大量に巻き込んだ。だが、まだ多くは残っている。

「よし。碧！交代だ！」

「了解！」

今度は俺が引き付ける！

「《雷よ！我が身に宿りて力と為せ》ボルトアーマー！」

雷が俺の身に宿った。

+++++

真正面から突っ込んできた一匹を右の拳で吹き飛ばす。

更に後ろ、斜め上方、右斜め後ろ、左斜め前から2匹づつ、けい8匹。

「消し飛べ！雷天駆！」

雷を纏った俺の全方位裏拳攻撃。

それは8匹のフレイムバットを一瞬にして、灰にした。

「翡翠！行くぞ！離れる！」

「応！」

一瞬で碧の横に移動。

その後に碧が、

「《邪を浄化する天光よ！彼の者たちを薙ぎ払え！》アークフォトン！」

魔術を発動。

無数のフレイムバットを天光が文字通り《消し去って》いく。
後には何も残らない。+++++

「ふあゝ。疲れたあゝ」

依頼が終わり、報酬を受けとって、宿に戻る途中、碧がそう言った。

「まあ結構歩いてたからなあ。仕方ないっちゃ仕方ないか。それよりもさ俺、部屋一つしかとって無いんだけど」

「別に一緒に寝ればいいじゃん」

「え？いいの？………じゃなくて！お前女なんだから少しは警戒とかしなくていいの？」

「え？だって昔、一緒に寝たろ？別にいいじゃんか」

「まあ………、お前が良いなら……。じゃなくて！駄目！一人で寝なさい！」

「んゝ、わかった。」

良いんだ、これで。まだ今は。いつか俺から言っただから。だからまだ今は………これでいい。

「んじゃ速く行くぞ？」

「おっけゝ」

そうして俺達の二人だけの旅が始まった。

新たな仲間……誰だかわかるよね？（後書き）

反省はしている。だが後悔はしていない……すみません許して下さい。

感想よろしくです。

俺と碧の共同戦線（前書き）

なあなあ行きますよー！

俺と碧の共同戦線

今、俺と碧は「深淵の森」というその名の通りの森に来ている。

もちろん、ギルドの依頼でだが。

「なあ〜翡翠〜、まだ出て来ないのか〜」

と碧、結構歩いて来たからわりと疲れているのかもしれない。

「う〜ん……。俺も初めてだからよくわからんが…、やっぱりおかしいよなあ」

そう俺達がこの森に入ってもう2、3時間は経っているのだ。それなのに、討伐目標である「アーマートロル」という魔物が出て来ない。

「うー、翡翠！腹が減った！」

「だーーーー！！依頼が終わったらなんか奢っから黙っどけ！」

「まじか！ならなんも言わない」

あ！やっちゃった。またこれだよ、また俺の金が……………
まあ自業自得だけども。

その時！

「碧！危ない！」

「ん？わあ！！！」

横からの一撃を碧を抱えて何とかかわした。

「大丈夫か！碧！」

「うん、まあ一応？」

「わかった、多分今のが『アーマートル』って奴だ。一瞬見えた腕が鉛色をしたからあれが硬いんだろ？」

「おけ。んじゃ殺りますか」

そうやって碧は詠唱を始めた。

「《焰よ、仇為す者を焼き尽くせ》オーバーフレイム！」

次の瞬間、業火がアーマートルをの右腕に纏わり付いた。

なにげに碧もチートだよね…。

だがアーマートルの右腕は多少焼け爛れた程度で、致命傷では無いようだ。

「駄目だ、炎じゃ対して効いてない！」

「わかった！………前衛は任せたぞ！」

え？あの化け物相手に？

+++++

「《雷よ我が身に宿りて力と為せ》ボルトアーマー」

攻撃開始だ！

「吹き飛べ！轟衝天雷撃！」

雷光を宿した拳の大地を削り、雲を貫く連撃。

「おらおらおらあ！！！」

そして最後の一撃で吹き飛ばす。

「今だ！碧！」

「応！終いだ！《氷よ、万物を貫く槍と化せ》フリーズランサー！」

そして無数の氷の槍による追撃が、アーマーコントロールの命を刈り取った。

+++++

「結局最初の不意打ち以外は無双だったな」

「そうだな」

そんな事を喋りながら街に帰っている今。

「それよりも、やっとランク、お前に追いつくんだな俺」

そう、俺は今回の依頼でやっとEランクに昇格できるのだ。

「ほお、頑張ってたんだねえ、偉い偉い。」

なんか馬鹿にされてる。

「まあいつか。それよりもお前、武器は要らないの？俺はほぼ素手だし、いざとなればこの刀を使えばいいけど、お前武器無いじゃん？」

「そうだな、実を言えば……………刀がいいんだよな」

は？

「んじゃお前は刀が欲しいの？」

頷く碧。

「……………じゃあいいよ、これやる」

「え？ホント？ありがとう！」

そう言っただけで心底嬉しそうに笑う碧。

まあ刀は無くとも拳一つでやってける自信はあるからいいんだけどね？

「んじゃ速く宿に戻ろう、なんか今日はいつも以上に疲れた」

「そうだな」

二人が通った後も

街の通りを紅く夕日が照らしていた。

俺と碧の共同戦線（後書き）

感想よろしくです

勃発。
(前書き)

急展開！作者もびっくりです。

勃発。

セルランド 某国 枢密院。

「それで、デモンズシャウトへの出兵はもう決まっていますのですな？ ゴルドン将軍殿」

「はい、準備は万全でございます閣下」

「そうか。他に報告はないか？」

「閣下！ 報告です！ デモンズシャウトに派遣していた隠密兵からの連絡が途絶えたとのことですよ！」

「……………そうか、もう気付かれたか。だがまあいい、こちらにも準備は出来ているのだ。作戦には我が国最強の騎士団、更には勇者殿も参戦してくれるそうさ。ただ一つの問題はドラゴニクスの動きだな……………。だがそう簡単に攻撃などもするまい。よし、作戦開始日時は今日正午ちょうど！ 皆に伝えよ！ これにて本日は解散とする！」
「今、まだ誰も知らない所ままに、戦争が始まるうとしていた。」

+++++

「おい、碧！ もう朝だ！ 起きろ！」

「んんー」

こいつは…………。

よし放置だ、俺は飯を食いに行こう。

「俺も行く!」

声にすら出さないのに反応する碧。

「んじゃさつさと着替える。行くのはそれからだ」

「んー。了解」

よし、俺は準備でもしますか。

+++++

所変わって食堂に来た。

朝なのに結構人がいるもんだなあ。なんて思いながら飯を食ってる
と、

「なあ、いつまでこの街にいるんだ?」

と碧。

「そうだな、もうそろそろ別の街にも行きたいよな。実はデモンズ
シャウトとかにも行ってみたいし」

俺達には目的地が無い。

でも、色んな所に行ってみたいと思うのは間違いではないはずだ。
まあ誰しもがそうだとは限らないが。

「ん？兄ちゃん、デモンズシャウトに行きたいのか？止めといた方がいいぜ、なにしろ近々戦争が起こるって話だ」

と、そこに人の良さそうなおっちゃんがそう言った。

「戦争！？そりゃ物騒だな。それはどこことだ？やっぱセルランドとか？」

「ご名答。まあただの噂だが、セルランドからデモンズシャウトへの出兵も検討されているらしい。ただこの大陸も巻き込まれるかは定かではないが」

「そうか、ご忠告ありがとうございます」

「いってことよ」

そんな話をひとしきりすると、何やら碧がおかしいことに気付いた。

「どうした？碧」

少し震えている。

「戦争って……………本当だと思っつか？」

「ああ。噂話はわりと当たるからな」

「なら……………助けなきゃ」

「誰をだ？」

「今の……魔王は、俺の…友達なんだよ！」

「！それは本当か!？」

「ああ、翡翠に会う前に知り合っただ」

「…………お前はどつするんだ？」

「出来るなら助けに行きたい。」

「なら、行くか？」

「行く」

余計な詮索はいらない。

親友が困っているなら全力で助けるのが親友だ。

「よし、じゃあ準備が出来次第、すぐにデモンズシャウトに向かうぞ」

碧の友達を救いに。

「わかった」

俺達に目的地ができた。

そこは剣と剣が交差し

魔術が飛び交い

怒号が響く

戦場だ。

+++++

準備ができ、俺達は、俺達の出せる限りの最速の速さでデモンズシヤウトに向かっていった。

時々、ぶつかってくる魔物は、当たると同時に彼方へと吹き飛んだ。それだけの速さがでているということだ。

尤も、現在は海の上を音速以上のスピードで走っているから、魔物などそうそう現れないのだが。

「翡翠！大陸が見えて来たぞ！」

街を出てから4時間。

日はもう俺達の真上にあつた。

勃発。
(後書き)

感想よろしくです。

作戦 (前書き)

お楽しみ下さい。

作戦

セルランド東海岸沖数10キロの地点に無数の艦隊が航行していた。いずれも、セルランドからデモンズシャウトへ出兵された軍艦なの。は言つまでもない。

その中に、一際豪華な装飾が施された軍艦が一隻あつた。

セルランドにおいて最強と名高い騎士団隊長「シルフィ・フロギス」と、同じく最強と謳われる勇者「シルバ・ランテロン」が乗っている戦艦だからだ。

総数2000隻もの大艦隊は現在、デモンズシャウト西海岸の西の流通地点「メルニア港」へと向かっている。

「おい！シルフィとシルバはいるか！」

男の怒鳴り声が勇者と騎士団隊長の乗っている戦艦に響く。

「お呼びでしょうか？閣下」
騎士隊長、シルフィだ。

「シルフィか、シルバはまだおらんようだ……。まあいい。シルフィ、お前にはメルニア港を制圧した後、内陸へ侵攻する隊を率いて欲しい」

「私がですか？……閣下のお頼みとなれば、私にお任せ下さい。必ずや閣下のお役に立ちましょう」

「ふむ、頼んだぞ。あとはシルバの方だが……」

「呼んだか？じじい。」

勇者、シルバだ。

「やっと来たか、ガキが。お前はメルニア港制圧の後、軍艦に乗り込み、主な流通地点の制圧を続けてもらう。異議は聞かぬ、以上だ」

「ちよつ、待てよじじい！なんで俺がそんな地味な仕事なんだよ！そんなの納得いくか！」

「異議は聞かんと言った筈だ、さっさと部屋に戻って準備をしておけ」

そう言った後、閣下と呼ばれた男は部屋から去って行った。

「クソっ！何でセルランド最強の俺がそんな地味な事を……」。

「ふん、まあいい、そんな命令無視して内陸へ侵攻すればいいだけだ。」

そう言い残し、シルバも自室へと戻って行った。

+++++

今、俺達はデモンズシャウト北々西に位置する軍港「ルクスリア」にいた。

「翡翠、来るとき西側にすごい数の軍艦が見えたか？」

「ああ、見えた。あのままじゃあと2時間程で大陸の西端に到着、
侵攻が始まるだろうな」

「なら急がないと！」

「いや待て、急いで向かったとして、その魔王は俺達の一存で行動
出来るのか？違うだろう？」

「でも放って置くなんて……」

「誰も放って置くなんていう訳じゃない。俺達の一存じゃ駄目なら
その魔王の一存で動けばいいだけの事。今はなるべく冷静に行動す
るべきだ」

「うん、わかった。じゃあ俺達は帝都に急ごう、遅くなったら大変
なことになる」

「そこでなんだが、俺と碧、今は別行動にしないか？俺も色々知り
たいことがあるんだ」

「別行動？別にいいけど、知りたいことって？」

「いや、たいしたことじゃないんだが。セルランドが出兵するんな
ら勇者の存在も否定できないんだ。なにしろ《勇者王の大陸》と呼
ばれるくらいだ、勇者は必ず来るだろう。そこで、俺が勇者の足止
めをする。だから碧は魔王の所へ行つて現状を伝えてきてくれ、ま
だ何も知らない一般人も多い」

「……………わかった。死ぬなよ？」

「ああ、俺はそんな簡単に死にはしないさ」

「そうだったな、じゃあそっちは任せる！健闘を祈る！」

「応！」

俺のやるべきことは、勇者の足止めだ。

勿論、殺すことはしないつもりだが、現状が現状だ。

それにどうしても一対多の戦闘では力加減が難しい。

でも勇者を戦闘不能にするだけで相手の軍の士気は相当下がるはず。

そこを討てば何とかなるはずだ。

「責任重大じゃねえか……………。でも、俺が出来なければ多くの命が戦争で死ぬ……………。なら、やらない訳には行かないだろ！」

そして俺は海岸線の道を西に向かって走りだした。

作戦。
(後書き)

相変わらず短いです。

感想お願いします。

戦闘。
(前書き)

短い！戦闘が限りなく短い！

戦闘。

現在俺の目の前には勇者と騎士隊長がいる。

碧と別れた後、俺は自身に身体強化の魔術をかけてここまで全力で走って来た。

だが、メルニア港に着いた時、既に数隻の戦艦が停泊していて大量の兵士が街道へ流れこんできた。その先頭に勇者「シルバ」がいたのだ。

「おい！シルバ！貴様、閣下の命令を聞いていたのか！貴様は流通地点の制圧が任務だろ！」

「うつせえ！黙れ！三下が俺に命令すんじゃねえ！俺は俺のやりたいうようにやるんだ！」

なんか仲間割れしてる。

おいおい……ちゃんとしろよ……。
だが好都合だ

「おい貴様！そこをどけ！」

「邪魔だ！どけ！」

なんか気付かれた。

せつかくのチャンスがあああ！！

「だが断る！」

俺にも仕事があるんでね！

「なら、無理矢理通るまでだ！」

そう言つて、勇者が剣を抜いて突っ込んできた。

「《風よ、彼の者を吹き飛ばせ》ウィンド・バーン！」

だが、そんな簡単に通られちゃ困る。

俺の放つた魔術で勇者と隊長以外の兵士は皆、港の方へ吹っ飛んでいった。

……やり過ぎたかな？

「気をつける！シルバ！こいつ魔術を使うぞ！」

「だからなんだってんだ！」

勇者はまた突っ込んできた。

ワンパターンだな、オイ。

「無駄だ！《雷よ、我が身に宿りて力と為せ》ボルトアーマー！」

「喰らえ！」

勇者が剣を一闪、しかし俺には届いていない。

「遅い。それでも勇者か？お前」

「ちっ、避けたか。まあいい本気を出してやる」

そう言つて、力を溜め始めた勇者。

「お前の敵は勇者だけではないぞ！《凍てつく氷、その身に受けよ》
《アイスアロー！》

隊長から魔力で作られた氷の矢が俺に飛んできた。

「くっ！」

何とか横っ飛びで避けたが、さすがに二人相手はきつい。

「はああああ！」

勇者の様子が変わった、これが本気か！

「ふはははは！俺様の本気に勝てるかあ！」

そう言つて俺に切り掛かってくる勇者。

速い！

だが俺よりは遅い！

その斬撃を避け、隙をついて右の拳を振るつた。

命中。

勇者はまた後ろに吹っ飛んだ。

「シルバ！」

隊長が叫ぶ。

だが攻撃は終わらない。

一瞬で勇者の後ろに回り込み、連撃を打つ。

「喰らえ！」

拳に宿った雷の煌めき、その輝きの中で勇者に無数の打撃を打ち込む。最後の一撃で空に浮かせ。

追撃。

「《轟け雷、我に仇為す者に雷神の怒りを放て》ヴォルテック・ジヤッジ！」

刹那、雷神の怒りが勇者に襲い掛かった。

「この……………、お……………れ……………が」

さすがに耐え切れなかったらしい、勇者はその場に倒れ伏した。

「次はお前だ」

あと一人。

+++++

その場には風の音がする。

一瞬で繰り出される斬撃と拳撃の雨。

しかし、一つとして命中はしない

隊長の放つ一閃、

当たらない。

俺の撃つ雷の煌めき。

当たらない。

何も当たらない。

攻撃が効かない。

痺れを切らした隊長が後方に大きく飛んだ。

詠唱。

「終わりにするぞ！《貫く、其は全てを氷結し砕く破壊の光。彼の者を打ち砕け》フリーズブレード！」

俺も対抗する。

「《雷にて彼の者を吹き飛ばせ》ライティングブラスト！」

凍てつく輝きと

蒼天の蒼い煌めきがぶつかり、爆発した。

「……………こ、こ……………ま…でか」

巻き上がった塵の中に立っていたのは俺だった。

戦闘。(後書き)

感想よろしくお願いします。

VS光 (前書き)

お楽しみください！

V S 光。

「はあ、はあっ……………」

くっ、流石にキツイ。

いくら俺がチートでも、この世界（セルランドの中）のトップクラス二人相手はキツイ。

戦闘中動き回って、魔術使いまくって、トドメに本気でぶっ放した。

結論。

やり過ぎたなあ。

てか……………疲れた。

さっさと休みたい。

はあ……………。

だけでも、そう簡単には行かない訳で……………。

「ほう？シルバとシルフィが負けるとはな」

見るからに強そうなおっちゃんが一人、俺の前に立っていた。

+++++

「アンタ、誰だ」

精一杯、低い声で言う。

「フフフ、それはこちらのセリフだ。なにせ、セルランド最強と名高い騎士団長と勇者が負けたのだからな。仮にもこちらの主戦力だったんでな。対するお前は、魔力こそ使いすぎたみたいだが、致命傷は、いや、切り傷一つないじゃないか。全く、どんな戦い方をしたら最強の二人に傷一つ負わずに勝てるのやら。」

適当に魔術撃ち合っていました！

「で？アンタは俺をどうするつもりだ？」

「無論、殺す。あ、そうだ、まだ名乗っていないかったな。光栄に思え我は ルキセル・マートン。この戦争の首謀者さ。」

尤も、名前ではなく「閣下」としか呼ばれてなかったが。と付け足した。

そんなことを言うおっちゃん、改めルキセル。

はあ……………疲れてんのかなあ。

「では、参る！」

そして、何処からか神々しい輝きを放つ剣を出し、構えてこちらに切り掛かってきた。

光の速さで。

「がはっ!?!」

30メートルくらい吹っ飛ばされた。

やべえ。あいつ、勇者とか隊長よりも遥かに強い。

負けるかもな。

あ、そうだ。

約束したじゃん、俺。

碧と、死なないって。

こんな所で、殺されたらあの世でどんな顔して碧に会えばいいんだよ。

馬鹿だな、俺。

こんな時にチートを使わないでいつ使うと？

「さあ、第二ラウンドといこうかあ!」

手加減なんかしない。

奴が俺を殺す気なら、俺も奴を殺す気でいく。

+++++

まず、魔力で一振りの刀を削った。

あれ？これわかってたら別に造ってもらわなくても必要なかったんじゃない？
まあそんなことは置いといて。

「倍返しだ！この野郎！」

光より速く奴の背後に回り込み、蹴り、蹴り、最後の蹴りで吹き飛ばす。

そして、地面を滑るように奴に近付き、

「斬空刃無塵衝　　！！」

手にしている刀で無数の斬撃を放つ。

落ちてくる前に友達ん家でやったゲームの主人公の技。俺は、弟くんのレベル3がお気に入りだが。

閑話休題

無数の斬撃を喰らった奴は、まだ生きていた。否、喰らった瞬間に、治癒術を使ったらしく、致命傷は免れたらしい。

「がはっ！……………くっ、貴様、やりおるな」

「アンタはどうなんだ？威勢がいいのは最初だけか？」

VS光 (後書き)

今回から使った術技の元ネタを参照したいと思います。

「斬空刃無塵衝」 某全てを守る騎士の技。

以上です！

それでは感想よろしくお願いします！

戦争騒ぎの後に(前書き)

あんまり話がまとまってませんが、それでも構わない人はどうぞ！

戦争騒ぎの後に

「はあ……………」

やっちまった。いや殺っちまった。

まあ奴から切り掛かって来たから、それに対処しただけだとも言い訳できるのだが、いかんせん、俺は日本人であり、日本という国では、殺人は犯罪である、と法律である。その殺人を俺は犯した。

……………なんか……………精神的にクるな……………。

「まあ…仕方なかったんだよ……………きつと」

でもイマイチ納得出来ない。

俺は「仕方ない」という理由だけで人を殺すのか？だが奴が切り掛かってきてもよく、こちらが切り掛かつては駄目。なんて理屈があったらそれこそ酷い理屈だ。

そこで、俺は、殺めた者を絶対に忘れないことにした。

絶対に、忘れない。

忘れたら、殺める恐怖を忘れることだから。

そんな奴は、俺は人間だとは思わないから。

だから、忘れない。

そう決めた。

+++++

「ふう……………」

んじゃ、そろそろ碧の所まで向かいますかね。

「でも、まあゆっくりでもいいよね?。」

目指すは碧!

俺の長い旅が始まった…………。

+++++

長い旅の筈なのに、もう目の前には魔王城の城下街、わかりやすく言うと、デモンズシャウトの首都、「デモニウス」の門が目の前にある。

だがこの門……………デカイよ!

何でこんなにデカイの!?

高さだけだったらきつとチエ・ホンマン8人分くらいの高さ。

うん、わかりにくいよね。

でもそのくらい高いんだよ。

んで、街の中に入ると、また賑やかでございます。

ほんとに賑やか、活気があるねえ、ん？あの女の人、猫耳だ！やべえ、ファンタジーだ！今更実感しちゃったよ、俺。

「とと、さっさと碧探して、また旅を続けますか」

そう、今は碧を探すのが先。

……でも、ちょっとくらい遅くなってもいいよね？

そうと決まれば、観光だ！

+++++

はい、捕まりました、俺。

え？何があつたって？

簡潔に言つと。

食堂に入った。 碧がいた。 捕まった。 食堂から引きずり出さ

れた。 今。

「翡翠！どうなったんだ！？勇者とやらは倒せたのか？怪我はないか？心配だったんだからな！？」

……この子めっちゃいい子。

「大丈夫大丈夫、何処も怪我しとらん。あと、戦争は多分回避され

たと思う」

「回避？何でわかるんだ？」

「んー、なんか、戦争の首謀者と名乗る奴を殺したから」

「へっ？殺した？」

途端に青ざめる碧。

まあ承知はしていた、俺でも軽蔑するかな、絶対。

「…………それは、言い方が悪いかもしれないが、仕方なかったんだろ？お前のことなら、きつと殺したことを忘れないだろう？なら、そんなに卑屈になることもないと思うぞ？」

「そっか…………優しいな、お前」

「へっ？や、優しい？」

ん？次は赤くなつたな。

面白い奴。

「ま、それは置いといて、これからどうする？俺は旅を続けるつもりだが、行きたい所はあるか？」

「…………ドラゴニクス。あんまり観光できなかったからな」

と、碧。

俺も賛成だ。だってドラゴン、見てないもん。

俺のなかでは
ファンタジー＝ドラゴン
という方程式があるんだ！

「んじゃそういうことで、もっかいドラゴニクスに行きますか。と
りあえず宿探すべ、疲れたし」

「了解」

そして俺達は再び、ドラゴニクスに向かうことになった。

戦争騒ぎの後に（後書き）

感想よろしくお願いします！

船は危険です！主に精神的に。(前書き)

短いです、かなり。

船は危険です！主に精神的に。

綺麗な海が広がっている。

海が太陽の光で輝いており、綺麗である

……本音を言えば眩しいけど。

それはともかくとして、今俺達は、メルニア港から出港した船に乗っている。

まあ別にどうでもいいかもしれないが、俺にとっては凄いことなのである。

「…………俺、船乗ったの初めてだ」

そう！それが凄いこと！

だって船だよ！船！

なんか今俺、めっちゃはしゃいでんよ！

でもね？はしゃぎすぎるとさ？

「うぶ、おえええええ」

こうなっちゃう訳よ。

おっと、お食事中の人には申し訳なかったか。

それはさておき、俺は盛大に酔っている。いやマジで酔っている。大変なくらい酔っている。

初めての船旅なのに〜！！

こんなんじゃ駄目じゃん！

初めてなんだよ！？船旅！

悔しい！悔しすぎる！

ちなみに碧は絶賛爆睡中でございます。

あゝあ、なんか面白いことね〜かなあ……………。

「わあああ！出たああああ！クラーケンだああああ！！」

お？面白いことはっけ〜ん！

+++++

海からもの凄い大きさのイカが船に乗り上げている。

えー！。なんかデカすぎだつてー！ー！。

「速く！奴を海に突き落とせ！戦える者は手伝ってくれ！」

と叫ぶ船の護衛兵さん。

ぶっちゃけ一方的すぎる戦いだ。

いや、だってデカインだよ？すごく。例えるなら、ドラゴンなクエ
スト？の二回目のあいつくらい大きいんだよ？つかあれもイカだっ
たよね！？まんまじゃねえか！

「でも、まあ助けよつかなあ……………うぶ、やっぱパス。ピンチに
なったらでいいよね？」

今は護衛兵さん達の戦いぶりを見てみよう！

まず、前衛らしい大剣を持ったおっちゃんがクラーケンに突っ込ん
だ。

あ。足斬られてんよ、クラーケン。

痛そー。

あ、なんかクラーケン、キレたっぽい。

ほら、大剣士さん、海に引きずり込まれちゃったもん。

え？なんでこっちくんの？

くんなあああ！！！！

今はダメだって！

今俺酔ってんの！

歩くのも大変なんだよ？

戦いたくないんだってば！

くるなああああ！……！！

+++++

そんなこんなで戦闘かいし〜。

ん？船酔いはもういいのかって？

仕方ないじゃん、あのタコが………イカが、イカが突っ込んで来るんだもん。

俺だって、やりたくてやってんじゃ無いんだよ？

あくまでも、自分の……俺と碧の命のためにやってんだよ。

だってあいつ爆睡してるから、船ごと沈められたらおしまいだよ？

「ギヤアアアア！！」

とイカさんが叫ぶ。

……………イカって叫ぶの？

そして、イカが！

足を俺に伸ばしてきました！
なんかうねうねする。

気持ち悪い。

「あー！ー！もー！ー！……！！！！！！《雷よ、彼の者に降り注げ》ライ
トニング！」

すると、蒼く輝く稲妻が、
ズドオオオオン！

と、凄い音をたててイカを貫いた。

あれま、焼きイカの出来上がり。

食いたくないけどね。

そんな焼きイカ。

だが、そんな焼きイカは、悲しいかな、海へと沈んでいった。

あー、食料がー。

ま、いつか？

食う気ないし。

それよりも、

「つづ、おえええええ」

船酔いが…酷すぎる！

船は危険です！主に精神的に。（後書き）

どんな些細なことでもいいので、感想よろしくお願いします！

長い道。多分……………（前書き）

今までで1・2を争う短さです。

長い道。多分……………

「ふう……………、地獄を見たぜ！」

と俺。

開口一番すいません。

「地獄って……………、なんかあったのか？ちょっと騒がしかったけど」と碧。

「ああ、俺の精神がズタズタに引き裂かれた。主に船酔いに」

「へへ、あ、これからどうすんの？」

そう、俺達は今、船を降りてドラゴニクス南部の港の一つ「エアリスク港」にいる。

そう！あの破滅のモンスター（船酔い）に勝ったのだ！

あの戦いは熾烈を極めた……………悪夢は船が出港してから始まった……………。奴（重ね重ね言いますが、船酔いです）は強かった。なにせ視界がフラフラしたからな、世の中にはあんな精神攻撃があるのか……………勉強になった。

いや、それよりもアイツだ、大ダコ。いや、イカだっけ？……………まあどっちでもいいや、その破滅のモンスターとの戦闘中大ダコが

現れやがったんだ。

俺はもう死ぬかt(ry

閑話休題

「んじゃあこの大陸の王都に行こ〜」

「お〜」

え？早い？

まあいいじゃん、決まったんだから。

そんな訳で、俺達はドラゴニクスの王都「フラムシュ」に向かうことになった。

+++++

いや〜、平和っていいねえ。

こんなにも空が青いなんて、今気付いたよ。

しかも今日は晴天だし、気分がいい！

ただ一つ、言いたいことがある。

「だあああー！ー！！あちいー！ー！！！」

クソ暑いのだ！

このクソ暑い中、俺と碧は地道に地道にここまでの長い道を歩いてきたのだ！

憎たらしいくらいに暑く道を照らしている太陽の下をな！

「碧、暑くねえの〜?」

「あちいよ〜。翡翠ーなんかやってー」

「うわー、棒読みー。」

「あーそつだ！魔術使えばいいじゃん！」

と、碧。

そつだ！魔術があつたか！

「なら、早速！《水よ、我が元に具現し渴きを癒せ》ウォーターベ
ール！」

早速魔術を使う碧。

いいなあ、水系統の魔術使えて。

「ぶはあ、生き返つたあ！んじゃ、行きますか！」

「え〜？俺にはなんもしてくんないの？」

「知るか、疲れる」

「酷い！酷すぎるー！」

畜生！そんなのつてありかよ！

と、心の中で愚痴りながらも、道は続く。

クソ暑い道が。どこまでも。

長い道。多分……………（後書き）

感想よろしくお願いします！

傭兵狩り。(前書き)

どうぞ、お楽しみ下さい！

傭兵狩り。

暑い道を延々と歩いてきて、やっと一つの街を見つけた。

「ふう……………、やっとここまで来たか。じゃあさっさと喉を潤しま
すか！」

「お〜！」

だが、何かおかしい。

暑いせいもあるだろうが、人っ子一人いないのだ。

……………何かありそうだな……………。

まあ、喉を潤したらすぐに発つから気にしないでおう。

だが、

「お〜つと兄ちゃん、生きてこの街をでたけりや金目の物、全部置
いてきな。」

なんか、ガラの悪いおに〜さんがたに囲まれちゃいました。

「おつと、その姉ちゃんも置いてくことだ。久しぶりの上玉だ」

ガラの悪いおに〜さん方、改め。性根の腐った屑共が口々に騒ぎ出

す。

「さあ！さつさとしゃがれ！ぶつ殺されてえのか！」

痺れを切らした「屑A」が騒ぎ出す。

うるせえなあ。

「黙れ」

しかし、俺より先に、碧がキレた。

「誰が金を置いてくかよ。普通に考えな、屑が」

「っ！、てめえ女だからっていい気になるんじゃないぞ！てめえもギルドに所属してんなら聞いたことがあるだろう。俺様はランクSの傭兵、”灼熱のヒルス”様だぞ！焼き殺されなくなったらさつさとしな！」

あ、前にもこんな奴いたな。

ただ、あいつよりランクが高いな。

まあ別に俺達にとつちゃ、ただの雑魚か。

ん？

「なあ碧、ギルドに所属している傭兵がこんな悪事を働いてるって報告したらさ、なんか報酬貰えつかない？」

「あ？………うん多分、報酬は貰えるんじゃない？………あ、そういうことか。じゃ、やりますか」

相手は約三十人、こちらは二人。
そういうことで、やりますか。
傭兵狩りを。

トトトトト

奴等が剣を抜いて、俺に切り掛かる。
瞬時に刀を具現させ、一刀の下に切り伏せる。

だが、三十人が三十人、俺を狙う訳では無い。

碧を狙った一人も、碧が帯刀していた刀で次々に倒されてゆく。
そして、後にはヒルスとやらしか残らない。

「っ！………なかなかやるじゃねえか。いいだろう、この俺直々に相手をしてやろうじゃねえか行くぞ！」

手にした剣に炎を宿らせ、灼熱の斬撃を放つヒルス。

だが、一つすら、俺達には届かない。

ただ、避けるのみ。

当たらないことに苛立ち始めたヒルスが、少し距離を置いて詠唱を始める。

「《爆ぜよ、爆炎。業火をもちて吹き飛ばせ》フレアストライク！」

瞬間、紅蓮の炎が爆ぜ、燃え、俺に襲い掛かる。

届かない。

「……………この程度か、拍子抜けだ、じゃあ行くぞ！」

具現した刀に紫電を纏い、切り掛かる。

受け止められた。

やはり、ランクSは伊達や酔狂じゃ無いか。

「っ、こんなに楽しいのは久しぶりだ！」

纏う炎をより強くし、更に切り掛かる。

また俺も、それに応じる。

纏う紫電が輝き、こちらも切り掛かる。

斬撃、炎、斬撃、刺突。

斬撃、紫電、雷、斬撃。

無数の攻撃が飛び交う。

ヒルスがより一層、纏う炎を強く、業火にして切り掛かる。

俺も、纏う紫電を、蒼く輝かせ、切り掛かる！

焰の朱い煌めきと

紫電の蒼い輝きが
一瞬の交差。

後に残るは、蒼い輝き。

傭兵狩り。
(後書き)

感想、意見、よろしくお願いします！

まさかの展開！？（前書き）

「じゃじゃじゃです！それでもおくだという方はどうぞ！」

まさかの展開!?

あの戦闘の後のことは、あまり覚えていない。

まああんな終わり方だったら俺が勝ったと思うだろうが、あの交差の後、ヒルスが倒れた次の瞬間に俺も倒れ伏したらしい。

らしい。という曖昧な表現なのは、前文でもあったとおり、覚えていないからだ。

宿のベッドで目が覚めてから、碧から教えて貰った。

……… まだまだだな、俺。

あんなにデカイ口叩いたくせに、かろうじてでしか勝てなかったっ
てか。

まあ深く考えなくていいか!

そんなふうな考えを終わらせた時、横にあったもう一つのベッドか
ら、寝息が聞こえてきた、………誰!?

ベッドから跳ね起き、横のベッドを見てみると、そこには!

「すう、すう………」

安らかな寝息をたてている少年………いや、少女かな?否、ヒルス
がそこに爆睡していた。

「……………なんか、普通の男の娘じゃん……………見た目は」
しばらく覗いていると、

「ハッ！ここはどこだ！」

とかいう、典型的な台詞を言って、いきなり起き上がった。
そして、開口一番に、

「！お前は、雷バカ！なんで俺は此処にいるんだ！」

と言った。

ほほう？雷バカ……………ねえ。

「てめえ！誰が雷バカだごるああ！俺が雷バカならお前は暑苦し
いアホじゃねえか！」

「なんだと！てめえ、黙ってりゃいい気になりやがって！くそつた
れが！」

「よし！頭にきた！てめえ表出るや！ギタギタにしてやんよ！」
と、ワイワイガヤガヤやっている。

ギィ、とドアが開いて、そこには碧が。そして碧は、

「黙れ 砕くぞ？」

「「すいませんっしたああ！！！」」

あれ？最近、扱いが酷い気がする。

ボタン、とドアが閉まり、碧は自分の部屋に戻ったようだ。
ふう〜〜。

「あ、そうだ。お前ヒスイって言うんだってな？」

と、ヒルス。

「ん？ああ、そうだが？」

「俺、久しぶりにあんな勝負したんだ。凄い面白かったんだよ、で
な？お前についていったら絶対他にも面白いことがあるだろ？だか
ら俺はお前についていくことにした。以上！」

「へ？」

多分、この時の俺は馬鹿みたいな顔をしていたに違いない。
だってヒルスが爆笑してたもん。

+++++

「なんか、ヒルスがついてくることになった」

「ヒルスが？いいんじゃない？」

なんて二つ返事で言うもんだから、すこし焦った。

でもまあ別にいつか！

ヒルスと戦ってた時、楽しかったのは俺もだし、なにより心強い！

ランクSは凄い！

ただ、用があるそうなので少しの間、自由行動ということになった。

+++++

自由行動しゅくりよ。

ん？ああ、まあいいじゃん。そんなに面白くなかったんだから。

それで、今は街道にいる。

「お前ら………こんなにいきあたりばったりな旅をしたのか………」

「まあな！」

おいおい、碧、そこで胸はっちゃんなんかイタい子に見えちゃうから！

それはさておき、ヒルスが仲間になって、人脈が格段に広がった。

俺達は元々、王都に向かう予定だったので、ヒルスが道案内をしてくれることになった。

それで今は、ヒルスの自己紹介中。

「よし、改めて、俺はヒルス、『ヒルス・ブレイム』だ。一応、ギルドランクはSで、『灼熱のヒルス』という通り名も持っている。好物はホットケーキで、嫌いな物はレバーだ、この世から消えて無くなっと思っていいと思っている。あとは………追い追い話すでしょう。………こんなところか、じゃあ改めてよろしく頼む」

と、がっちり握手を交わす。

やっぱり力が強い。

見た目は男の娘なのにな。

そんなこんなで、仲間が増えました。

まさかの展開！？（後書き）

………やっちまいました。

でもいいですよね？少しくらいはしゃいでも。

そんな訳で、感想、意見よろしく願います！

短すぎる人物紹介。(前書き)

一応、わかりやすいように書いてみました。

短すぎる人物紹介。

主人公

名前、霧神 翡翠

性別、男

年齢、15歳

魔術属性、「風」「雷」「闇」

使用武器、刀、素手

備考、ある日の下校途中に、この世界に落ちた。祖父から様々な暗殺法を修得しているため、喧嘩はめっっぽう強い。

ヒロイン。

名前、白星 碧

性別、女

年齢、15歳

魔術属性、「炎」「水」「光」

使用武器、刀

備考、翡翠の幼馴染み。翡翠がある街にたどり着いた時に再会した。

+++++

他のキャラクター。

ヒルス・ブレイム

炎の魔術の使い手。その剣技の才能も相まってランクSである。『灼熱のヒルス』という通り名を持つ。』

シルフィ・フロギス
セルランドの騎士団の中で最強の騎士。

シルバ・ランテロン
セルランド最強の勇者。自分勝手に、誰に対しても臆さずに話す。

ルキセル・マートン
戦争の首謀者。はつきりいってシルバや、シルフィより遙かに強い。

ルシファランさん
翡翠が落ちてきて、最初にあつた人。騎士団の隊長である。

短すぎる人物紹介。(後書き)

やっぱり、短すぎますね……………。

暴力はダメ！ゼツタイ！（前書き）

ひどい過激な内容となっております。『注意』をください。

暴力はダメ！ゼツタイ！

暗い、ここはどこ？

今、俺は何をしているの？

前後左右上下、見渡す限り真っ暗闇。

知っている。

俺はこんな所を知っている。

此処は、ああ、そこだ。

あの時の……………。

+++++

「夢　　か……………」

目が覚めた。

なんか久しぶりに夢を見た気がする。

……………あまりいい夢ではなかったが。

「ん？あれ？どこだ？此処」

俺は、荷馬車の上に寝ていたらしく、いつのまにかもう太陽が真上にある。

「お？起きたか、ヒスイ」

ヒルスが声をかけてきた。

「ヒルス。俺たちってこんな馬車持ってたっけ？」

「あ？んん、なんかさつき、碧が魔術で創ったらしい。……………魔術でこんなを作るか？普通……………」

「魔術で？……………色んな事出来んのな……………魔術って」

ん？碧がいない。

「なあ、碧どこに行った？」

するとヒルスは、

「ん、小b 「吹き飛ば！」 ぶべらあ！？」

ん？なんか碧が戻ってきた。

あれ？ヒルスが吹っ飛んでる。……………まあいつか！

「お帰り、碧。お前なにしてたの？」

と、聞くと、

ん？

「なんで俺は寝てただっけ？」

と聞くと

「え？お前いきなり『ぼるあ！？』とかいって寝たじゃん」

「え？俺そんな寝方したの！？なにそのイタイ奴！」

すると碧は笑って

「お前だな」

俺のガラスのハートを見事、粉々にデストロイしてくれやがりました。

「……………泣いてもいい？」

「断る」

なんでそんなに楽しげなの！？碧！あとヒルス！お前寝たふりしてんだろ！笑い堪えてんのわかり安すぎるぞ！！

「はぁ……………。ところで此処どこ？」

そう碧に聞くと、

「知らん！」

絶望的な答えが返ってきた。

+++++

翌日　　早朝。

「ヒルス、起きてるか？」

「ん？　　ああ、今起きた」

「したら、碧に気づかれないようについてきてくれ」

「気づかれないように？ ああ、了解だ」

そう言っつて静かに馬車から2kmくらい離れて、ヒルスに。

「昨日の仕返しだごるああ！！」

「えええええ！？」

全力で襲い掛かった。

数十分後

消し炭と化した俺と、縮こまってひたすら怯えているヒルスと、それを見て、邪悪な笑みを浮かべている碧がいた。

暴力はダメ！ゼツタイ！（後書き）

感想、意見よろしくお願いします！

王都に落ちちゃ

k

できてないや！(前書き)

お楽しみくださいー！

王都に到っちゃk

できてないや！

翌日。

「お？ヒルス。あのでっかい塔って王都の建物か？」

「でっかい塔？　ああ、『神龍の大迷宮』だな。その通りだ。あの建物は王都のど真ん中に建っている」

「ど真ん中！？なんでまたそんなでかい物を？」

「いや、これは子供ん時に父ちゃんから聞いた話なんだが。なんでも、王都を創った時、既にあの塔があって、あの塔の周りに街を創ったらしい」

「ほ〜。こりやまたでかい街なんだろうなあ」

「まあ、王都と呼ばれる位だからな。そりやでかいだろうよ」

なんかワクワクしてきた！

そうだ！またギルドの依頼でも受けようかなあ！

「あ、今更だが碧。魔王様とやらは無事だったのか？いや、すごい話変わるけどさ」

「魔王様？　ああ魔王ね、勿論無事だったよ。まあ、勇者の軍が

全てお前に殲滅されたからな」

「そっか」

割と気になっていた事がこれだった。

無事だったのかあ、よかったなあ。

すると、ヒルスがいきなり。

「そうだ！ヒスイ、ミドリ。俺達でギルドの『パーティ』を組まないか？」

と、言った。

「『パーティ』？なんだ、それ」

と聞くと。

「ああ、『パーティ』ってのはな。ギルドに所属している傭兵の集まりみたいなもので、『パーティ』に所属している傭兵は、その『パーティ』の一員として、依頼を受けることができるんだ。例えば、『パーティ』の中に、Aランクの傭兵がいる場合、その『パーティ』に所属する傭兵は、Eランクでも、Aランクの依頼が受けれるってこと。わかったか？」

おーっと、わかりやすい説明ありがとうございませう。

「なあヒルス。その『パーティ』ってのには名前をつけるのか？」

碧が聞いた。

「ああ。必要だな。パーティ名が無いと、まず、『パーティ』として成立しないからな」

名前？……………どうするか。

「なあ、どうする？」

ヒルスに聞くと、

「適当でいいんじゃない？」

おいおい、そんなんでいいのか？

「んじゃ、一人一案出し合おう！」

と、碧。

「そうするか！」

「そうだな」

んで、一案ずつ、出し合うことになった。

+++++

「んじゃ俺からな、『魔狩りのつる』」「はいはいボツボツ！ダメだつて！いくらこの世界にないからってダメ！ゼツタイ！」
なんだよ、畜生」

いきなりヒルスが爆弾発言するところだったよ。

まあ、やったことないけどさ！ヴェ○ペリア（注、作者はやったこととはありません。本当です。知っているのは、ユー○くとフ○ンくとレイ○ンくらいです）なんて、だって家にXboxとかPS3とか無いんだもん！グレイ○スfもやったことは無い！グ○イセスはあるが。

「んじゃ次は俺だな、ここは『凜々の』またそのネタか！よく知らないからそのネタで攻めるのはやめてくれ！」　　なんだよー
頑張つて考えたんだぞー？」

まあ『the first Strike』は見たけどさ？

いや、感動したよ、あれは。
本当に。

「ヒスイ、さつさとしろよ、次はお前の番だぞ？」

ん？俺か。

「俺はなあ……………『アクエリアス』なんてどうだ？」

ん？碧、なんでそんな目でこつちを見る。

いいじゃん別に、美味しいよ、アクエリアス。

そんな碧とは反対にヒルスは、

「『アクエリアス』かぁー！いいじゃん！それ！よし、けつてーい
！」

勝手に決めちゃったよ。

でもまあいいか！

楽しけりゃ！

王都に到ちゃk

できてないや！（後書き）

この内容は本文と全く関係無いので飛ばしてくれて構いません。
いや、駄文の中の駄文なので、むしろ飛ばして下さい。

本文中にもありましたが、作者はティーズ厨（友人談）の癖に、や
ったことあるのは、

ア〇ス

イノ〇ンス

グレイ〇ス

〇ーツ

マイ〇□2

マイ〇□3

のみで、内、持っているのは

ア〇ス

イノ〇ンス

しかありません！

ご了承下さい！

ちなみに好きなキャラは

マ〇ク

パスカ〇

ヒューバート

ル○

イリ○

ス○ーダ

ガ○

ジェ○ド

です！一応、このキャラの全ての秘奥義の決め台詞は覚えていきます！

余談ですが、作者はYouTubeにて、秘奥義集を閲覧することが最大の趣味です。

長々と駄文を失礼致しました。

では！

感想、意見、よろしくお願いします！

今度こそ！王都にやじさちゅーくー！（前書き）

短いです。

今度こそ！王都にとつちや〜く！

なんだかんだで王都にとつちや〜く。

はあ……………やっとだよ。

長かったなあ……………。

だが、これでやっと！

「よし！俺は寝るぞ！思いっきり寝てやる！さあ、宿屋に直行だ！」

ダラダラしてやる！

「ダメだ、さつさとギルドに行つてパーティを登録してこなきゃならん」

と、ヒルス。

「えー、んなもん一人で行けよー」

「残念ながら無理だ。本人がいないとパーティに所属出来ないぞ？」

はあ、面倒臭い。

でも、これやしないと寝れねえしなあ……………。

よし、

「んじゃさっさと行こう。そしてさっさと寝よう」

「寝るのは変わらないのな……」

なんかヒルスに呆れられた。

じゃあ行くぞー！ってな！

+++++

んで、ギルドん中。

ヒルスがカウンターに行ったので、勝手に登録しといてくれるらしい。

本人がいないと無理なんじゃないのかって聞いたたら、ちゃんと確認に来てくれるとか。

それにしても賑やかだなあ。

前に入ったギルドより、段違いに賑やかだ。

やっぱ、王都つてのが凄い効果なんだな。

そんなことを思っていると、ヒルスが戻ってきた。

「ヒスイ、ミドリ。登録するからこっちに来てくれ」

「ああ」

+++++

パーティ『アクエリアス』を登録した後、なんか寝る気も失せたので、街を歩いていた。

やっぱり賑やかだなあ。

見渡す限り、人、人、人。
だもんなあ。

「なあヒルス。確かあの塔って迷宮なんだよな？」

碧がヒルスに尋ねた。

「ああ、確かに迷宮だ。それに中の魔物は強すぎるから、Bランク程度の傭兵なら2階に上がるのも無理だろうな。なにせ、それが、約500階もある」

はあ！？500階！？

それに、Bランクでも無理ってか！？

「そんな所クリアできる奴なんているのかよ！？」

と、碧。

正論だ。

「ああ、多分な。例えば、セルランドの勇者『シルバ・ランテロン』

とかなら行けると思う」

勇者？

ああ、あの猪突猛進バカか。

ほほう、あのレベルかあ……。

あれ？行けそうじゃない？

「なあヒルス。今度乗り込んでみようぜ！」

「言っと思ったよ。でも、今度な。今はお前らのランクを上げる」
「とが先だ」

「りよーかい！」

楽しみだなあ！

今度こそ！王都にとりかき！
（後書き）

感想、意見、よろしくお願いします！

もう一人の、俺。(前書き)

帰ってきました！魔王(仮)です！それではどうぞ！

もう一人の、俺。

ヤア、オキテヨ、ボク。

ハヤクオキナイト、ダメジャナイカ。

サア、ハヤクオキテヨ、ボク。

お前は、誰だ。

オマエ？ボクハキミダヨ？

どういう意味だ？

ソノママノイミサ。ボクハキミデ、キミハボクダ。

お前が俺で、俺がお前？

ソウ、ボクハキミダヨ。アノトキノ、キミダ。

やめろ、気分が悪くなる。

ハハハ、スベテキミノセイジヤナイカ！

やめろと言っているんだ。

フッフ、キミガシタコトダロウ？ボクハアノトキ、タノシカッタヨ
？マタアバレヨウヨ！

やめる、やめる！お前は俺じゃない！

フッフ、チガウ、ボクハ、キミダ。

違う！

ドンナニワスレヨウトシテモムダダヨ。

なにが望みだ？

ナندا、モウレイセイニナツチャッタнда。オモシロクナイナア。
……ボクノノゾミ？シイテイエバ、スベテヲコワスコトカナ？キ
ミのスベテヲ。

なぜだ。なぜ、俺なんだ。

なぜ？ソナノカンタンジヤナイカ。ナニモワカッテイナイキミエ
ノフクシュウサ。

復讐？またやる気が！？

モチロンサ、キミニハモットクルシンデモラワナイトネ。ナニセ、
アノトキスベテヲコワシタノハ、キミナндаカラ、ヒスイクン？

+++++

「……………い！……………翠！大…夫…！？」

なにか聞こえる。

この声は……………碧か。

俺は、なにをしているんだ？

なんか、気分の悪い夢を……………そうか、あの時の夢か……………。

「翡翠！大丈夫か！？翡翠！」

「……………ああ。大丈夫だ」

そう言っつて、起き上がったたら、もう昼過ぎだった。

あれ？いつから寝てたんだろ？俺。

「大丈夫か？翡翠。だいぶうなされてたぞ？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけてすまなかつたな、碧」

そう言っつと、

「本当か？顔が真っ赤だぞ？熱でもあるんじゃないか？」

と、言われた。

熱？……………そういえば、頭がガンガンする。

ああ、熱が出たのか。

だから、あの夢を……………。

そんなことを思っていると、碧の手が、俺の額に伸びてきた。

「ほら、やっぱり熱があるじゃないか！今日は休んでるんだ。わか
つたな、翡翠！」

「ええー、ギルドの依頼はー？」

「駄目に決まってるだろう！」

くそー、じゃあ何をしてればいいんだよー。

「ん？そういえばヒルスは？」

「ヒルス？ああ、ヒルスなら今、依頼の最中だぞ？」

「はあ？依頼？俺も行きたいし……………ゴホン！ゴホン！……………うっー」

「熱が下がってからな」

ちくしょー！

力はチートでも免疫力はチートじゃないのかよ！

「まあまあ、そう怒りなさんな。治ったらまた行けばいいだろ？」

「うっー」

「……………寝ないんなら、力づくで寝かすぞ？」

「はい寝ます！今すぐ！」

全く！病人には優しくしようよ！

+++++

やっぱり暇だあー！ー！ー！！

暇すぎるだろ！なんなんだよ！コレ！

「うっん……………むにゃむにゃ」

なんか、碧も寝とるし。

なんだかなあ……………。

復讐………か。

まあ、少しは思っていたがな。
碧もあの時のことを知ってたっけな。

もう一人の、俺………か。

もう一人の、俺。（後書き）

次回からは、翡翠くんの過去の話に入る予定です。

感想、意見。よろしくお願いします！

むかしのこと。(前書き)

すこし重いかもしれません。
では、よいほど。

むかしのこと。

翌日ー。

すっかり熱も下がった俺は、ギルドの依頼を終えて帰ってきたヒルスを埋めていました。…え？八つ当たりだって？当たり前じゃないか！

とまあ、そんな茶番は置いといて。

昨日見た夢について考えていた。

……………そう、あれはあの時の……………。

+++++

小3の時の俺には、両親がいなかった。

まあ、小学校に入る前に交通事故で亡くなってしまって、その時から、じいちゃんに育てられていた。

楽しかった。

じいちゃんがいて、友達がいて、碧がいた。

それだけで済めばよかったのに。

小3の夏休みに、ソレは起こった。いや、俺が起こしてしまった、最悪の事件。

+++++

夏休みも終わりに近づいてきたある日、ソイツに会った。

ソイツは、真っ黒なローブを羽織っていて、不気味だった。

そして、近づいてきたソイツは、俺に聞いた。

「『力』が、欲しくないか？」

と、

『力』と聞いて俺が思い浮かべたのが、『魔法』だった。

まあ、その時に、ドクエにはまっていたのもあると思うが、小3の俺に、魔法ってというのは、かつこよく感じたからだと思う。

そして、俺はその問いに答えた、いや、答えてしまった。

「欲しい」

と、

すると、ソイツは、ローブのフードの隙間から見えていた口元を二

ヤリと笑わせて、言ってきた。

「そうか、ならくれてやろう、君が今、一番欲しい『力』をな」

そう言ってソイツは、俺の頭の上に手をかざした

その手の平から暖かい光みたいなのが俺の身体の中にはいつてきて、不思議に思った。

その後、ソイツが叫ぶ。

「フッフ、もう君は僕の人形だ！」

その後の事は、よく覚えていない。

気がつけば俺は、じいちゃんとよく来ていた山に、……いや、もう更地と化したその山にいた。

母さんと、父さんの墓があった山に。

小さい子供達の遊び場となっていた山に、俺はいた。

ただ、違うことは、更地だったこと。

母さんと、父さんの墓も

遊んでいた、十数人の子供達も
全て、いなくなっていた。

否、消し飛んでいた。

俺の、あの時、真つ黒なローブを羽織ったアイツが俺に渡した『力』が、俺の、思い出を、いとも簡単に消し飛ばしたらしい。

一瞬で。

気がついた時に近くにいた、ソイツが言っていた。

「君の力が、こうしたんだよ？まあ、そうさせたのは僕だけどね。ハハハ、逃げられないからね？全部、君がやったんだから」

全部？俺が？

嘘だ、そんなこと、あるはずがない。

そんな馬鹿げたこと、あるわけないじゃないか。

嘘だ、嘘だ、嘘だっ！

俺は何もしていない！

全部お前のせいだ！

「ああ、君にそうさせたのは僕だよ？ただ、消し飛ばしたのは、君。僕は、君にそうさせるきっかけを与えただけ。ただそれだけの話さ」

きっかけ？

するとソイツは、フードの隙間から見える口元から、白く輝く、人間には無い『牙』を除かせて言った。

「僕は、絶望しきった人間の表情を見るのが、大好きなんだ」

なんだ、それ。

「だから、君にも絶望してもらおうよ？理由なんてない、………まあ、あるとすれば、近くにいたから、かな？」

なんだ、それ。

「さあ、ハヤク絶望してよ」

なんだよ！それ！？

そんなくだらない理由で、俺はこんな事をしたのか？

違う。

「ハハハ、消し飛ばしたのは君だと何回言ったらわかるのさ」

違う。

「さあさあ、ハヤク絶望シテヨ」

違うっ！

俺じゃない！

「ちっ、面白くない。………まあいいさ、しばらく放っておいてやるよ。次に思い出した時に、遊びにクルカラネ？ボク？」

次の瞬間、ソイツはいなくなっていた。

俺が、やったんじゃない！

全部、全部お前のせいだ！！

俺のせいじゃ、無い。

更地と化した山で気絶した少年が警察に保護されたのは、その少し後のことだった。

むかしのこと。(後書き)

誤字、脱字や、感想、意見、よろしくお願いします！

久しぶりの依頼だぜ！（前書き）

少し、息抜きに書きました。

久しぶりの依頼だぜ！

「おーい！ヒスイ！お前、俺のこと埋めてるのわすれてんだろ！」

はっ！

少々、昔の事を思い出していたようだ。

なんか足元に、地面から首だけを出した変態がこっちを見ている。

どうする？

・なぐる

・ける ピッ

・きる (KILL)

ガッ！

「いってえ！なにすんだこの野郎！」

「おうおう、言ってくるじゃねえか！もとはと言えばてめえが勝手に依頼受けてっからわりいんだろうが！仲間がダウンしてる時になに自分だけ楽しんでんだよ！」

「上等だこの野郎！」

そう言つてヒルスは地面から這い出してきた。

……………なんかアレだな、うん。

「なんだあ？殺つてやろうじゃねえかゴルア！」

拳に紫電を纏わせる俺。

「はっ、笑止！」

拳に業火を纏わせるヒルス。

「……………」

こめかみに青筋を立てる碧。

あれ？

数十分後

「……………なあ、ヒスイ」

「なんだ？ヒルス」

「少しは、自重するか」

「大いに賛成だ！」

地面に突き刺さった二つの影がそこにあった。

+++++

地面から何とか抜け出した後、俺たちはギルドに向かっていた。

ちゃんと熱は下がったんだ。

昨日、暇で仕方なかったウサ晴らしをしようじゃないか！

「ふふふ……………」

「……………おい、ミドリ。なんかヒスイがおかしくないか？」

「だめだ、ヒルス。気にしたら負けだ」

「……………わかった」

おや？なにか聞こえたかな？

気のせいだよな。

+++++

そんで、ギルド到着。

「んじゃ、依頼さがすか。できれば、魔物の討伐、もしくは殲滅が
いい」

「りょーかい。んじゃ、散らばって探すぞ」

「おー！」

まず一枚目。

「依頼内容

アイツの討ばて

」

なんか見たことあるー！ー！ー！！！！

これ前にもあったよね！？まだ誰も受けてないの？まあ誰も受けな
いと思うけどさあ！つかアイツって一体誰なんだあああああああ
！！！！！！

よし次。

あれ？なんかデジャヴ。

「依頼内容 ワイバーンの討伐。

依頼概要 俺のお気に入りの散歩コースにワイバーンが出るよ
うになっちまった。誰かこいつをどうにかしてくれ！

報酬 銀貨15枚

依頼ランク E

」

これでいつか！

+++++

他の皆も良さそうなやつが見つかったらしく、すでに集まっていた。

「よし、んじや確認するぞ?」

まず俺が選んだのを二人に見せる。

「ワイバーンの討伐……ねえ……」

「ほっ……」

あれ?なんか……。

「どっだ?」

「別にいいんじゃない?でも、一応皆の確認してからな」

ほっ、よかった。

「次は俺だな」

と、ヒルス。

「依頼内容 ニードルブロウの討伐

依頼概要 かわいい私の弟がこいつに襲われた。幸い、弟は怪我一つ無かったが許しておけない。だが、残念なことに私はか弱い美女なのである。そこで、こいつの討伐を頼みたい。

報酬 銀貨50枚

依頼ランク C

「

まあ、いいんじゃない？

パーティで受けるんなら、ヒルスがいるからSランクまでの依頼なら受けられるし、俺と碧のランクもすぐ上がると思うし。

「いいと思うぜ、俺のより」

「そうか？」

「よし、最後は俺だな！」

碧が言った。

……………変なの持ってきたんじゃないかな。ろくな。

「依頼内容 アイアンゴーレムの討伐

依頼概要 殺ってくれ。

報酬 銀貨25枚

依頼ランク D 「

……………殺ってくれってさあ…なんかやだなあ……………。

「んじゃ、どれがいい？まずヒルスから」

「俺か？俺のかなあ。少しは肩慣らしになるだろ？」

「そうか、んじゃ碧は？」

「俺もヒルスのでいいと思うぞ?」

「ならヒルスのにするか」

そうして、久しぶりの依頼が決まった!

久しぶりの依頼だぜ！（後書き）

感想、意見どしどしお願いします！

遭遇（前書き）

短めです。

遭遇

ニードルブロウとは、かなり大きめのゴリラの体中にトゲがついているのが特徴の魔物だ。

通常、ニードルブロウは強い雄が、群れを作り行動するが、稀に単独行動をする個体もある。そのような個体は、群れを作る個体より遥かに強い個体だ。

俺たちの討伐目標は、単独行動をする個体だ。

それにニードルブロウは、警戒心が強く、よっぽど懐いた場合でないと人間には近づかない。万一、近づかれたとしても、持ち前の腕力と体中のトゲで、時には殺して、生き延びる。

ってというのが、ニードルブロウの大まかな説明。

そして、今俺たちがいるのはニードルブロウのいる森の中。

だが、いつころに出ってくる気配が無い。だからといって、奥に進んでも、遭遇しない。そんなことの繰り返しで、もう3時間が経とうとしていた。

「……………なあ、いくらなんでも遅すぎねえ？」

言ったのは碧。

同感だ、いつまでここにいりゃならんのだ。

対してヒルスは、

「警戒心が強いんだから当たり前だ。我慢して探せ」

「はいはい」

と、言つてまた探索を始めた。

暇だあ。

なんなんだよこれはー！。

せつかく楽しめると思って依頼受けたのにー！。こんな仕打ちありかよー！

すると、近くの茂みから、

ガサガサと音が。

何かいる。

拳を構え、いつでも対処できるようにしていると、茂みから一匹の白い影が飛び出した。

そのまま影は俺に襲い掛かる。

だが、わざわざ喰らってやるほど馬鹿な俺でもない。

握りしめていた左の拳で、その影に向かって殴り掛かる。

「キャウンっ！」

と、吠えて吹っ飛んでいったソレは、あれ、もう見えなくなってる。

「おいおい、相変わらずだな。お前」

いや、ただ単に殴っただけです。それ以上でも、以下でもありません。

………ただの雑魚だったな。

っっていう顔をしていると、ヒルスが、

「……………こいつ、慣れてる!」

と、言った。

失礼な!俺は慣れてなどない!

そんな感じで進んでいると、

「グルオオアアア!」

なんか、それっぽいのに出くわしました。

遭遇（後書き）

感想、意見とじとじお願いします！

戦闘……魔物とね？(前書き)

お楽しみあれ

戦闘………魔物とね？

「っ！おいヒルス！こいつがニードルブロウか！？」

「ああ！気をつける！」

茂みから飛び掛かってきたモノには、何でも貫くことが出来そうなトゲがついていた。

そしてもう一つ。

「……………でか」

そう、とてつもなくデカイのだ。

なんてことを言っていると、

「グルオオアアア！」

とか言っつて、突っ込んで来た。

うわー、こいつ馬鹿だー。

難無く避けてみせ、すれ違いざまに、蹴りを放つ。

ごりゅ。っていう変な音を出しながら、ニードルブロウは飛んでいった。

「つつ……ああ、血い出てんじゃん」

しかし、右足にトゲが刺さってしまったらしく、少し血が流れている。

「大丈夫か？翡翠」

「ああ。つてお前、なに逃げてんだよ!？」

気がつくと碧は、木の上にいた。……あの魔物なら木の一本や二本、楽に倒せそうな気がするんだが。

「なんだと！お前はか弱い乙女に魔物と戦えと言っのか！」

「お前のどこが弱いんだ!？」

むしろ、チートだ。

「ヒスイ！危ない！」

いきなり、ヒルスの怒鳴り声が聞こえた。

次の瞬間、俺は吹っ飛んでいた。

+++++

「がつ!?!」

数メートル吹っ飛んだ。

……畜生、やりやがったなクソ野郎が。

あれ?俺こんなキャラだっけ?

まあいい。ようはあの化け物を、倒せばいいだけだ。

「ふうっ…………。行くぞ!」

なんて、アニメの主人公ぶった台詞を吐いて。

ニードルブロウとの戦闘が始まった。

キキキキ

始めから、こいつは魔術を使わないで戦うつもりだったので
いつでも、身体強化は使う 早速、拳に紫電を纏う。 と

「ヒルス、碧。こいつは俺が仕留める。いいな?」

とだけ言い、返答を聞かずに奴に襲い掛かる。

右拳を振るう。

顔面に命中。

左足を振るう。

右掌に命中。

……今気づいたんだが、こいつの頭にはトゲってないらしい。

弱点めっけ！

しかし、攻撃を当て続けることも出来ないので、一旦、距離をとる。
ふう、久しぶりだな、こんな感覚は。

「グルアアアア！」

少し距離をとったものの、やはりランク相当というべきか、一瞬で差を詰められた。

想定内。

すぐさま、左足で、奴の顔面を蹴り飛ばす。

だが、見た目相応の体重があるらしく、ろくに力の入らない蹴りでは奴を吹っ飛ばすことは出来なかった。

「っ！面倒臭えなっ！」

追撃の右拳を放つ。

しかし、それよりも速く、奴の爪が襲い掛かる。

「っ！」

紙一重でそれを避け、右拳を放つ。

だが、避けられる。

そのまま奴は、距離をとった。

……やっぱり面倒臭いな。

魔術使つちまうか？

……いや、素手でいこう。こんな雑魚程度にいちいち使ってられ
つか！

一瞬で距離を詰め、右拳を放つ。

命中。

そのまま、顎を蹴り上げ、渾身の掌底を腹に放つ。

命中。

「ガルアア！」

と、叫び、吹っ飛んだ。

だが、まだ立ち上がる。

「本つつつ当に面倒臭えよ………」

また、突っ込んで来る。

直線的な動作は避け安く、隙を生むが、

ドゴオン！

威力は一級品。

ちなみに今の音は、岩が木っ端微塵になった音。

……あんなのを喰らったのか、俺。

……なんか、もうどうでもよくなってきた。

さっさと済みますか。

「《我、纏うは蒼天の紫電。》」

詠唱を始める。

「《汝に待ち受けるのは、絶対の死》」

奴は、何をするでもなく、ただ佇んでいる。

さっさとは大違いだ。

「《神よ、我が拳に、仇為すものを滅ぼす力を与えよ。》

瞬間、俺の両腕が、蒼く輝き出した。

「雷装、《蒼》」

続けて、

「雷迅、《轟》」

言つが速く、奴の体が地に伏した。

一瞬だった。

戦闘……魔物とね？（後書き）

感想、意見とじしお願いします！

たい焼きって、美味しいよね。いや、本文とは関係無いけどね？（前書き）

昨日、更新できなくてすみません。

ではございどー！

たい焼きって、美味しいよね。いや、本文とは関係無いけどね？

たまに思うんだ。人は皆、悪いことは駄目だと言っけど、そういう人こそ、悪い人なんだと。ん？俺？……………違うっ！って言いたいけど、生憎俺は悪い人。……………なんか語呂がいいな、今の。……………ごほんごほん。話が逸れた。そういう悪い人は、多分、その人なりには周りに対して、体よく過ごしてきたんだらうけど、俺には通じない。そんな猫かぶり、俺には通じないぞ！！！！つまり、なにが言いたいかって言うのと。

「碧っ！やめろ！今度こそ死んじゃうからっ！俺の人生終わっちゃうから！」

刀を鞘から抜いて、今にも切り掛からんとする鬼を止めたかっただけである！

ひゅん！

「うわあ！危ないって碧！」

しゅん！

「うわあっ！かすった！かすったよ今！」

しゃりん！

「うわあああ！誰か助けてええ！！」

+++++

一時間後、宿に戻って来て、動き疲れたらしい鬼は、ベッドに飛び込んで、寝た。

……さっきのこと、説明したほうがいいよね？

んじゃ説明しよう。

あん時、いや、依頼の帰りだったんだが、俺とヒルスで、ちょっとした言い合いになったんだ。本当にちょっとした言い合いだ。例えるなら、目玉焼きはソースと醤油、どっちがいいか。とかかな？

まあ、わかるよね？

そう！その言い合いがヒートアップしたんだ！

その後はもう早かった。

俺、ヒスイ、言い合い始める ヒートアップ 碧、突如キレる 矛
先はヒルス ヒルスDead！ 次は俺 剣撃を避け続ける俺 碧、
疲れる 宿に戻る 碧、ベッドにダイブ

だぜ！

+++++

ヒルスが復活し、俺とヒルスは大通りを歩いていた。

ん？碧？置いてきた。

まあ、別にいいじゃんか。

それにしても……………

「賑わってんなあ……………」

俺が呟いたその言葉に、律儀にヒルスは、

「まあそうだろう。何しろ、今は武闘大会の季節だからなあ」

……………武闘大会？

「なんだそれ？」

「ん？知らないのか？ヒスイ。武闘大会ってのは」

はいはい！説明です。

……かい摘まんと言つと、武器を自由に使つてもよく、場外負けの無くなった「天下一武〇会」だ！

ほんとにテキトーだな（汗

でも、そーゆーのが武闘大会である。

「ふーん。んで、ヒルスは出んの？」

「……………出たいね。本音を言えば」

「出ないのか？」

「団体戦枠しか空いてないんだよ。もう、な」

「なら、俺たちで出るか。興味あるし、武闘大会」

「え？いいのか？ありがとう！！ヒスイ！」

「うむ！男に二言は無い！」

そんなこんなで、武闘大会に参戦することになった。

宿に戻って、碧に言ったら。

「別にいいよー」

とのこと。

助かった……………。

たい焼きって、美味いよね。いや、本文とは関係無いけどね？（後書き）

感想、意見よろしくお願いします！

予選、一回戦。(前書き)

戦闘描写が壊滅的だ……。

予選、一回戦。

そんなこんなで、闘技場に来ました！

解説の私こと、霧神　翡翠も盛り上がってきましたあああああ
あああ！！

おーっと、あれは鬼人^{オーガ}かあ？あーっと、次は狼の獣人^{ビースト}だああ！すげえええ！ネコミミ^{ドラゴノイド}だああ！おお！次は竜人^{ドラゴノイド}だああ！

……………疲れた。よし、やめよ。

あれ？

「そついえば、もう『団体枠』とやらには登録したのか？」

「ああ、もう登録済みだ。ちなみに俺たちは予選3回戦目だな」

「りょーかい」

3回戦目かあ……………それなりに強い奴らと当たればいいなあ。
なんて考える俺は多分酷い奴なんだろな。

「翡翠、1回戦、始まるってよ。さっさと控室行くぞ！」

「オーライ」

まあ、頑張るか！

+++++

やっぱりゴツい奴らばっかだなあ……。ぶっちゃけ死ぬると思う。
死ぬ気なんて無いけどね！

それにしてもゴツいなあ。少なくとも、剣とか槍とか斧とか銃とか
………銃！？そんなのありか！？………まあ、いつか。

すると、1回戦目が始まるらしく、審判の声が聞こえてきた。

「レディースアンドジェントルメンっ！今年もこの季節がやって来
ましたあああ！！その名も『ドラゴニクス・トーナメント』！この
大会で、ドラゴニクス最強のチームが決まるっ！……」

ワアアアアアっ！！！！

歓声が響く。

「さあさあさあさあ！では、説明だ！ルールは簡単！敵のチーム全員を気絶、又は戦闘不能にしたら勝ちだ！しかあしつ！殺したり、意図的に観客席を攻撃した時点で負けになる！わかったところから始めるぞっ！」

「第1回戦っ！疾風とはこいつのことを言う！一瞬で、全てを切り裂き、一秒には全て終わっている！『瞬速、スロウ』の率いる『風舞』だああ！」

どうやら、スロウってのは、双剣士らしく、二振りの剣を携えている。スロウの後ろには、剣士や魔術師、拳士という、総勢4人からなるチームみたいだ。

あ、審判の仕事奪っちゃった。

「それに対するは、こいつは全てを焼き尽くす！『業火の調』を率いる『バリス・シリウト』だあ！」

見るからにチャライ奴がいる。どうやら、バリスって奴だろう。だって、あいつの後ろに3人いるし。ちなみに武器はレイピアだ。いや、めっちゃ細いからそうだろうと思ったただけだ。

「それでは、両チーム、準備はいいか！では勝負、始め！」

先に動いたのはスロウ。二刀から繰り出される斬撃が、バリスを襲う。次いで、バリス側の魔術師が魔術を発動。バリスの前に、炎の壁が出来た。しかし、スロウは剣に風を纏い、真一文字に切り裂いただけで、それを吹き飛ばす。だが、そこにバリスはいなかった。

目の前で展開される、凄まじい戦い。

それは、

速く

強く

美しい。

特に、スロウとバリスの立ち回りには、一種の舞蹈を連想させるものがあった。

だが、所詮は人間。体力の限界がある。

最初に倒れたのは魔術師。どちらも、二人の攻撃の流れ弾を喰らって倒れたのだ。

次いで、他の奴らも倒れていき、残ったのは最初の二人。

スロウとバリスである。

一旦距離をとった二人。最初に動いたのはスロウ。剣撃を放つより先に、詠唱を始めた。

無論、黙って見過ごすバリスでもない。「詠唱」という最大の際を、真正面から叩きに行った。それが、間違いだった。

スロウの魔術の詠唱がとてつもなく短かったのだ。詠唱が短い魔術は総じて、威力は弱いのが、突っ込んで来る相手に対してなら相当の威力と化す。発動した魔術、『ウィンドカッター』は、簡単にバリスを切り裂き、また、スロウ自身も、双剣にて、切り裂いた。

一時は、あんなに美しい戦いを見せた二人だったが、終わりはこんなに呆気ない。だが、それがこの大会、「ドラゴニクス・トーナメント」なのだ。

+++++

凄かった。その一言に尽きる。

俺では、あんな戦いは展開出来ないだろう。

だが、それもそうだろう。

何しろ、この大陸「最強」を決める大会だ。

皆、強敵揃いだ。

「やっぱりみんなレベル高えなあ……」

一人で呟いたはずの一言は、しっかりヒルスたちの耳にも届いていた。

予選、一回戦。(後書き)

感想、意見よろしくお願いします！

俺たちの試合ーだぜ！（前書き）

本っっっ当に遅くなってすみません！待っていてくれた方々には
本当に申し訳ありません。
では、どござー！

俺たちの試合ーだぜ！

「さあ！続いては2試合目です！では両組舞台へ」

そんなわけで、2試合目が始まる。まだ俺たちの番では無いが、次なのでそれなりに緊張はしている。

そんなことを考えていると。

「おい！第3試合目で俺たちと当たる奴らはどいつだ！」

と、聞こえてきた。

3試合目って あいつらとかよ。

振り向くと、そこにいたのは筋骨隆々とした男達、3人。

皆、ゴツい斧を持っていて、見るからに うん、アレだ、こいつら、雑魚い。

ワアアアアアア！

と、2試合目が始まったらしい。

……こいつらに時間を割く必要は無いな。

そう結論づけ試合を観戦することにした。

だが甘かった。こちらには一人問題児がいることを忘れていた。

「なんだ、俺たちの相手はお前らか。がっかりだな。めちゃくちゃ弱そうじゃん。な？翡翠」

なにせ碧がいたんだから。

+++++

「っ！なんだと！このガキが！」

ほーら！なんかキレたっぽいよ！？このおっちゃん方！？

「なんだと言われても、本当の事を言ったただけだが？」

だが、碧は止まらない。

もうやめて！絶対面倒になるから！

「っ！……………そうかそうか。なんでそんなに威勢がいいのかと思えば、お前んところにはあの《灼熱のヒルス》がいるじゃねえか。つまりはそういうことだろ？てめえ自身にはなんの実力もねえからこいつに助けて貰ってる。そうだろ？雑魚が」

なにか盛大な勘違いをしているみたいですね。このおっちゃん。

……………もう離れていよう。最初に同意を迫られた気がするが、おっちゃんが気づいてないならいいや。

だが！

「なんだ？お前らは目の前にいる奴の実力もわからない三下なのか？俺もがっかりだ」

ヒルスもか！？

なんなんだ！一体！

俺は試合を観戦したいだけなのに！

「……………！まあいい。ようは試合でてめえらをぶっ飛ばせばいいだけだ。よく見てみたら、そのガキ、女じゃねえか。はは、女なんか俺たちに勝つかよ！女は《灼熱のヒルス》で充分だ！」

……………あーっと、それ地雷だつて。

ヒルスは女では無い！……………れっきとした男の子 じゃなくて男の娘だ！

ほらほら、なんかヒルス震えてるよ？

俺しーらねっと。

「俺は女じゃねえ！くそ！てめえらただで済むと思うなよ！」

ほーら、怒っちゃった。

まあ、自業自得ってことで。

「なんだと！？《灼熱のヒルス》は女じゃ無かったのか！？」

ざわめきが、控室の中を覆いつくす。

「なんだよ！俺が男じゃ悪いのかよ！誰がなんと言おうと男は男だ

」！

……………そんな本気にならなくても。

もう、いいや……………。

ワアアアアアア！！

大歓声が聞こえてきた。どうやら2試合目が終わったようだ。

もう戦うの？こいつらと。

+++++

「さあ！いよいよ試合目に入りました！もう前置きは要らない！さっさと選手紹介に移ります！」

「まずは、あの《灼熱のヒルス》率いる、チーム『アクエリアス』です！」

今思ったらなんか変だな、この名前。まあいいや。

「対するのはこのチーム、《豪傑団》だーっ！」

ワアアアアアア！

歓声が起こる。

………本物の豪傑ならあの程度のことではいけないと思うが。まあよしとしよう。

「では両組、試合　　始め！」

+++++

刹那。

相手の一人が吹っ飛んだ。

その身に業火を受けながら。

「……………ただで済むかよ」

振り向くと、阿修羅がいた。

……………嘘じゃないよ！？本当だよ！なんかヒルスの背後にそんな感じのオーラが見えるんだよ！？

「ヒルス……………ほどほどにな」

多分、聞いてないと思うが一応言っておく。

んじゃ、本格的にやりますか。

+++++

残りの一人も、碧が相手するらしく、俺の敵は一人。

さっきのリーダー格の奴だ。

ちやつちやとやるか。

「《雷装》 紫電」

こないだ試してみた、《気》と《魔力》の融合。

なんとか使いこなせるようになってきて、色んな形に使用できるようになった。

その中の《紫電》は、そのままの《紫電》を、身体に宿すもの。そのため、普通の打撃が更に強くなるのに加え、移動速度も、通常から《雷速》へと進化する。

だが、デメリットもある。
それは魔力の消費量。

この技は、俺だからこそできる「ドーピング」だ。なんせ、異世界補正のおかげで魔力が無尽蔵だからだ。

少し、説明が長くなってしまったが。つまりは《雷装》とは、雷を纏うこと。ただそれだけの単純なことだ。

だが、まあ単純な分。
使いやすく強い！

「《紫電》 刹那」

雷迅 の比にならぬほど強い打撃。

ただの右拳。

それを雷速で打ち込むだけ。

それだけで、全て終わる。

ただの右拳で、この勝負は決した。

「試合終了！勝者、チーム『アクエリアス』！」

俺たちの試合ーだぜ！（後書き）

誤字や脱字などがあつたら報告をお願いすると同時に。
感想、意見どしどしお願いします！

腹減ったぜ！（前書き）

最短です。

腹減ったぜ！

その後、予選、全ての組の試合が終了した。なお、2回戦は明日かららしく、今日に予定されていた全ての試合が終わった。

熱気に包まれる闘技場を出ると、まだ日は頭の真上に……まだ昼かよ。

「なあ、どうする？」

碧が聞いてくる。

「どうするって……とりあえず昼飯にするか？ヒルスはどうだ？」

「ああ、昼飯がいい。いい加減腹がへった」

まあ……あんだけ動いたら……ねえ？

「んじゃこの辺で飯が美味しい店はわかるか？ヒルス」

「飯の美味しい店か……あ！確かこの辺に」

「あ！あの出店でいつか！んじゃ行くぞヒルス」

「おい待てやお前。人に聞いたいてなに言い始めんだこの野郎！」

「うるさいぞヒルス」

「誰のせいだ誰の!？」

「はぁ……………これだから子供は……………」

「残念ながら立派な大人だよ！」

「えっ!? そうなの!？」

「そっだよこの野郎! だいたいお前は」

「あ、もう着いたから自重しろヒルス」

「一体なんなんだお前はーっ!？」

やっぱりヒルスで遊ぶのは面白いな。

あんまりやり過ぎると酷い目に遭わされるが……………あれは酷かったな……………。

まあいいや。腹減ったし!

+++++

「んじゃ、これとこれ、三つずつ頼む」

「おう、じゃ、少し待っててくれや」

出店で頼んだのは、フランクフルトっぽいやつと、フライドポテト。

なんか久々だなあ……………こんなの。

「はい、出来たぜ。会計は銅貨20枚だ

「おう、これだな」

「えっと、……………ちょうど20枚だな。毎度あり!」

昼飯を買って碧たちに渡す。

お前ら……………渡された瞬間に食いはじめるとか……………いや、何も言うまい。

+++++

昼飯も食い終わり、宿屋に戻るが……………なんにせよ、やることが無い。

「暇だなあ……………」

ヒルスが呟く。

いや、聞こえる様に言ったら呟く意味無いよ？

まあいいけどさ。

「にしても暇だね

『どかああん！』

なんだ今のは！？」

なんか爆発音が！

腹減ったぜ！（後書き）

最後のくだりがやりたくて書きました。後悔はしていない！

すみません、調子のりました。

誤字や脱字などがあつたら報告よろしくお願いします。

尚、感想、どしどしお願いします！

ボンバーマンって直訳すると爆弾男だよね（前書き）

お待たせしました！ではどうぞ。

ボンバーマンって直訳すると爆弾男だよな

突然外から聞こえてきた爆発音に驚いて、宿を出ると、近くの建物から火が上がっていた。

疑問に思っ、あの建物から逃げてきたであろうおっちゃんに聞いてみると

「バ、バリスが暴れてやがるんだ！」

バリス？ああ、一回戦で敗退した奴か。

なかなか強そうだったんだがなあ……………。

「大方、負けた事に腹立ててんだろ？自警団でも呼んで来ればいいだろ」

「無理だっ、バリスはAランクの傭兵だから、自警団程度、瞬殺だ」

そう言っ、逃げていくおっちゃん。

いや、ガキだろ、バリス……………。

つか、あんな勝負した奴がこんなこと……………やっぱガキだな。

「なあ、どうするんだ？」

碧が聞いてくる。
どうするってたって…………。

「ヒルス、俺たちで止めるのってできる？」

「いや、《ドラゴニクス・トーナメント》の参加者は、大会期間に街で、問題を起こした選手の登録を抹消してしまうから、今俺たちが止めに入ったら多分、戦闘になるし、そうなったら大会の登録抹消されるからな。誰かに伝えるしかないだろうな」

そっかあ…………。

あ！そうだ。

「いつそギルドに報告してみつか？」

「そうだな…………うん、それが妥当だな」

よし、じゃあ報告しに行くか。

だが！？

「そんな事聞いて黙って行かせられないよねえ？」

振り向くと、そこにバリスがいた。

+++++

そんなこんなで絶賛逃走中だぜ！

ただ、一つ気になることが。

「なあヒルス！これって問題になる？」

「ちゃんと伝えれば大丈夫だと思う！」

ならいいや。

つかギルドどこだああ！

結構走ってんのにまだ着かないぞ！？

あ！微かに見えてきたあれは！

「ギルドだ！あともうちよっとだ！頑張れ！」

なら、頑張るしかないでしょう！

「っ！？逃がすか！《焰の業火にて焼き尽くす》バーニングフラッシュユー！」

辺り一面を照らす程の炎の壁が迫って来る。

「なんだありやあ！反則だろ！？っ！《風よ、集いて我等を護る壁となれ》ウィンドウォール！」

なんとか唱えた魔術によつて防ぐことができた。

あれ？

「ヒルス、今のって「正当防衛だ！」……………そうですね」
なら良かった。
さあ！報告だ！
なんかバリスが唾然としてるけど！

+++++

「はい、承りました。Aランク登録者、バリス「シリユト様の登録を剥奪させて頂きます。ご報告ありがとうございます」

あららら、こんな簡単に剥奪されちゃうんだ……………。

無いと思っけど、一応気をつけよう……………。

また暇になったかあ……………。

「んじゃ帰るか？」

「そ…だなあ……………帰るか」

「じゃあ帰るか！」

気がつくともう日は落ちかけていた。

+++++

一方、そのころ。

「ちっ……あいつら……！覚えてやがれ、必ずぶっ飛ばしてやっ
かな」

そんな事を言う男がいた。

ボンバーマンって直訳すると爆弾男だよね（後書き）

誤字、脱字があったら報告よろしくお願いします。

尚、感想、どしどしお願いします！

V5プローナ(前書き)

短めです。

VSプローナ

〈大会日程二日目〉

昨日、いろいろと大変だったが二日目になった。さすが、大陸一を決める大会と言ったところだろうか、二日目でも観客が多い。

一日目より多いんじゃないかね？つか仕事とか無いの！？あんたらどんだけ暇なんだよ！？

「ヒスイ、ぶつぶつ言ってないでさっさと行くぞ。一試合目なんだから」

「え？そうだったけ？」

知らなかった！

「ああ、だからさっさと控室行って準備するぞ」

「了解です」

相手は誰なんだろ……………。
弱いといいな。速く終わるし。

だが！俺は甘かった。

そう、生キヤラメルよりも……………。
(注) 作者は生キヤラメルを食

べた事がありません。あしからず。

+++++

「ご来場の皆様にお伝えします。これより、《ドラゴニクス・トーナメント》二日目の日程、全組の2回戦目を行います！
では、一試合目。《灼熱のヒルス》率いる、チーム《アクエリアス》！対するは無名の傭兵。プローナ選手率いる《ポーン》です！」

どうしてこうなった!?

目の前にいる「プローナ」って言う人、めっちゃ目つき悪い。つうか背高すぎんだろ!?

あと………こつ、なんていうか、オーラが違う。そう、昨日のバリスとは次元が違う位に。

痛いのだなあ………。

「両者、準備はよろしいですか？」

よろしくありません。いや、とても。

「では　　始め！」

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

キキキキ

「《撃ち抜く爆炎》 プラストフレア！」

始まった瞬間、ヒルスがプローナに魔術を放つ。

それは爆炎。

だが。

「《貫く旋風》 ウィンドアロー」

プローナの放った魔術によって、いとも簡単にかき消された。

おい、これでもヒルスはSランクだぞ？無名なのに強すぎんだろ。

ヒルスが手加減したのかもしれないが。

しかし、プローナが

「ふう、死ぬかと思った」

あ、結構いっぱいっばいな感じですね。

「っ！、簡単にかき消されるとはな………まあいい。ヒスイ、ミドリ。こいつに手は出すな。俺が倒す。」

おお、格好いいねえ。

「じゃあ任せた！」

「了解、任された！」

とりあえず、雑魚を碧が一掃。
……あれ？俺の仕事は？
まあいつか。

+++++

ヒルスが放つ、灼熱の斬撃。

「喰らえ！《魔王炎撃波》！」

だが、避けられる。

プローナが攻撃の隙を突いて、手に持つ槍で一閃。

命中。

直後、ヒルスは吹き飛ばされた。

「あ、あぶねえだろうが！この野郎！《逆巻け旋風》ウィンドスト
ーム！」

竜巻がヒルスを襲う。

勿論、プローナの追撃である。

しかし、流石Sランクと言ったところか、間一髪、追撃を避けて見
せた。

だが、劣勢であるのに変わりはない。

「っ！ラチがあかねえ。次で決める！」

途端に、ヒルスの剣が朱く輝く。

「《緋凰絶炎衝》！」

刹那。

朱き炎の灼熱の疾走がプローナを襲う。

舞い上がった埃の中に立っていたのは。

プローナだった。

V S フローナ (後書き)

誤字や脱字などがあつたら報告お願いします。
尚、感想、どしどしお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665s/>

少年のファンタジー

2011年6月12日00時18分発行